

革の手袋

見る人の心々にまかせおきて

高嶺にすめる秋の夜の月

この歌は一昨年の秋キナダで客死された新渡戸先生が、よく若い人達に書いて贈られた古歌の一つである。而もそれに就ては實に面白いエピソードがある。

先生が十一、二歳の頃であつた、當時東京の竹川町で洋服屋を開いてゐた叔父の太田時敏さんのところに、兄弟二人で世話になりながら、或塾にはいつて勉強してゐた。

然るに、兄は頗る病身で、性質もおとなしかつた。或時その兄が病みついて叔父の家に歸つてゐた、先生は日曜日に見舞ひに行つたが、いつもの通り、二十錢の小遣錢を買つて塾に歸つ

た。

その歸り途のことである。銀座の尾張町にさしかゝると、唐物屋の棚ざらいがあつて、往來に色々の品物が並べてあつた。さうして値段は何れも普通の十分の一位のものであつた。その中に二十錢の正札のついてゐる「革の手袋」があつた。

無論それは明治五年頃のことであるから、子供に手袋は用のない時代であつた。併し先生は二十錢の手袋なら自分にも買へる程度のものだと考へて、遂にそれを買つてしまつた。さうして一週間といふものは、風呂にもはいらず、煎餅も食はず、自分では大きな親孝行をしたつもりで、次の土曜日を待つて、叔父の家に歸り、病床の兄にそれを與へた。

兄は別に必要な品とは思はなかつたらしいが、それでも珍らしいので大變に喜んだ、ところがその次の土曜日に歸宅して見ると、家の中の空氣が重苦しく、不愉快に思はれた。殊に叔父の態度はいかにも物騒に見えた。

その夜、先生は叔父さんの家にとまつたが、床につくなり、直ちに眠つてしまつた。併し間もなく、荒々しく起すものがあるので、眼をあけて見ると、それは叔父であつた。彼はいきな

り先生をひきずる様にして、次の間に連れて行つて、拳骨であたまを打つた。まだはつきり眼の醒めてゐない先生は少からず面喰つた。

「貴様は何といふ心得ちがひをしたのだ。外のことならとにかく、他人のものに手をかけるといふことがあるか。若しもこんなことが郷里のお母さんに聞えたら、わしも申譯がない」かういつて叔父は涙を流してゐた。先生には何が何だかわけがわからなかつた。聽て手袋を手に入れたいきさつを話した。ところが、そこにゐた叔母さんが

「お前が何と云つても證據があるから駄目だ。あんな舶來の手袋をどこから持つて來た？」と叱めた。

先生は二十錢で買へたのだと話したが、そんな安い品ではないといつて承知しない。假り靴それが二十錢で買へたとしても一週間お小遣なしで済むわけがないから、きつとどこからお金をとつて使つたらう。この間家で少しお金がなくなつたことを思ひ合はすれば、お前が家のお金を持ち出したのだらうといはれた。

先生はこの言葉を聽いて幼な心にも悲しくもあり、口惜しくもあつた。さうして叔母を銀座

の店につれて行つて身のあかしを立てようかとも思つた。しかしそれもやめにして、叔母の思ふがまゝにしておかうと決心した。……さうして先生は、何等辯解もせず、また怨みもいはず、絶對の沈黙を守りつゞけた。

それから十數年も経つた後のことである。或時「見る人の心々にまかせおきて高嶺にすめる秋の夜の月」といふ一首の歌を見出して先生は初めて「これなる哉」と思つた。さうして先生はそれ以來晩年に至るまで、どんなに世間から論難され、又は人身攻撃を受けることがあつても、未だ曾て辯解といふものを書いたり、述べたり、したことは、たゞの一度もなかつた。

併し世の中には「革の手袋」見た様な迷惑な話はさらにある。過ぐる第六十七議會で問題になつた五十萬元事件の如き實にその一例に過ぎない。さうしてこの問題に對する床次先生の態度の立派であつたことは今更論するまでもない。

僕は議會において、先生の立派な態度を眺めながら「……高嶺にすめる秋の夜の月」の感を深うした。さうして新渡戸先生の在りし日の姿を思ひ浮べながら、偉い人には、どこかに共通の點があるものだなあと思つた。

人の一生には色々があるものだ。本人は夢にも知らないことが、世間ではいかにもまことしやかに宣傳されることがあり、さらに影も形もないことが、現実のことであるかの如く非難されることもある。さうして僕にもそんな様な體驗がないでもない。併しあの有名な白隠禪師でさへ、門前の小娘に難題を持ちかけられる世の中！ たゞそれに對する白隠の態度こそは、實に我等の學ぶべき態度ではないか！

——一〇・六・二〇——

一冊の古本

明治二十六年の夏！ それは僕が十三歳の時であつた。或日父に向つて、「來年はいよいよ東京に行くわけですが、一體僕は何の學問をすればよいのですか」とたづねて見た。

「お前は長男だから、軍人よりも實業の方がよからう」と父はいつた。そこで僕は、更に、「實業に關する學問」に就て説明を求めたところ、父は「實業の學問にも色々ある。……商業、工業、農業、様々だ」と答へた。

その頃僕達の家庭では、商業は賤しいものだと思はれてゐた。また農村に生れた十三歳の少年に工業の解る筈もない。そこで僕は農學をやらうと考へ、「農業にも偉い學校がありますか」とたづねた。

父は「駒場に農科大学があるが、そこを卒業すれば、農學士に成れる」といつた。……農學士！ 僕はその農學士に成つて郷里に歸り、農業をやらうと思つた。さうして「それでは農學をやることにしませうか？」といつた。

「東郷の家は四代前から特に開墾、造林その他殖産のことに力を盡して來た家柄だ、故に祖先の遺風を繼ぐのもよからう」といつて父もわけなくそれに賛成して呉れた。

斯くて翌二十七年の五月に農學を志して上京した僕は、その翌年の九月には府立一中の二年に入學が出来た。

丁度入學の當日であつた。僕は「札幌農學校の生徒募集廣告」を興味を以て眺めた。それには中學の卒業生は豫修科に入學を許すと書いてあつた。僕は「同じ農學校でも、これはきつと程度の高い學校に違ひない」と思つた。

その後親類の者から「札幌農學校は、駒場と同じ大學程度の學校であり、農學士にもなれるが、校風も立派だし、特に拓殖に關する學問が優れてゐる」と教へられた。さうしてこれが「札幌」を僕のあたまに深く刻み込んだ第一歩であつた。

中學の三年頃になると、僕のあたまは餘程變つて來た。即ち「ちつぽけな内地の農業にいくら努力して見ても、それは知れたものだ。一つ駒場にはいるのをやめて、札幌に行き、卒業の上は、北海道の開拓に従事しよう」といふ氣がして來た。……さうして四代前の祖父も、今の世にゐたら、きつと僕と同じ考へであるに違ひないと思つた。

新渡戸先生の「農業本論」が世に出たのは、僕が四年生の時であつた。それを蘇峰先生が「日本にもこんな立派な學者があるか」といつて大變ほめたのを國民新聞で讀んだ。さうして僕は初めて新渡戸といふ仁が札幌農學校の出身であり、教授であることを知つた。……「そんな偉い先生を出した學校であり、現に其先生が教鞭をとつてゐる學校なら、自分も行つて見度いな」と思つた。さうして僕のあたまは、それによつて、より強く「札幌」に引きつけられてしまつた。

或日僕は銀座を一人で歩いて見た。ところが偶然にも或本屋の店頭に「札幌農學校」といふ古本が一冊ころがつてゐるのが目についた。

「札幌農學校！ 僕はその本がほしくてたまらなかつた。貧乏書生には、教科書以外の本を

買ふだけの餘裕はなかつた。併し僕は財布の底をたいてそれを買つた——無論それは三十錢位のものであつた——さうして僕は熱心にそれを讀んだ。

北海道の大自然！ それに札幌農學校の卓越した校風！ 殊にクラーク先生が馬上豊かに残して行つたといふ、あの有名な「ボーイス・ビー・アンビシャス！」の言葉！ 一つとして僕の若き血潮を躍らせないものはなかつた。……斯くて一冊の古本「札幌農學校」は、遂に僕の「札幌行き」を決定的ならしむるに至つた。

明治三十二年の九月には、夙くも僕は「札幌の人」となつた。而も北海道のあの雄大な自然と、あの偉大なる校風とは、僕に大きな感化を與へずにはおかなかつた。即ち僕の心の中には「北海道が何だ」といつた様な氣持が起きて來た。北海道の開拓だけでは到底日本の國は救はれない。眞に日本を救ひ得るものは、「植民政策」あるのみだと考へる様になつた。……さうして四代前の祖父が、今の世に生れてゐたならば、きつと海外發展の大經綸を行つたに相違ないと考へた。従つて自分もさうすることが、祖先の遺風を繼承する所以だと思つて、遂に「植民政策」の專攻を決心した。

僕が農學士に成つて郷里に歸らうと思つたのは財部に於ける十三歳の時であつた。更に札幌に學び卒業の上は北海道開拓の任に當らうと考へたのは、東京に於ける十八歳の時であつた。然るに心境更に一變して「植民政策」の遂行に一生を捧げようと決心したのは、札幌に於ける二十三歳の時であつた。斯くて二十五歳の年には、僕の處女作「日本植民論」を完成するこゝとが出来た。

一冊の古本「札幌農學校」が僕一生の運命を決する上に大きな力であつたことを思ふとき、僕は今でも、その本屋の前を通る毎に、一種の感激を覺ゆる……

『自惚』は禁物

「學者は迂遠なもの、學問は不經濟なもの」といふ觀念が、國民一般の頭を強く支配してゐたのが、過去に於ける我國の實情であつた。

これは我國の實業教育が近年に至るまで、學問的にも實際的にも、不徹底であつた結果である。然るにその實業教育が五十年の歳月を經過して、最近漸くその實力を發揮することになつたのは、實に喜ぶべきことだ。さうしてこれは從來歐米模倣翻譯のみに終始一貫してゐた我國の學問が、近年漸くその域を脱し、獨創的となり、日本的となり、眞に學問としての徹底的價値が「日本及日本人」といふ特殊の事情により充分に發揮せらるゝに至つた結果である。即ち國境なき學問の特殊化であり、日本化であることを思ふとき、我等は一種の誇りを感じる。

最近に於ける我國の工業製品の海外進出は實に目醒ましいもので、今や世界到るところに日本品の姿を見ざるなきの盛況である。即ちゴム靴、陶磁器、食料品、硝子製品、玩具等一般雜貨の進出は素より、イギリス人愛用のパイプが日本の製品であり、また日本のジュエリータンがその本家たるエジプトに中を利かせ、電氣工業の優越を誇るドイツに於て、ベルリンの夜を照らす電球、殊にクリスマス用の豆電球の大部分が日本製なるの事實は確かにその一般を物語つてゐるではないか。

また世界綿業の中心地たるランカシャの紡績職工が日本製のシャツを着るに至つては實に天下の奇觀でもある。

更に紡績業の大發展は、遂に師の國イギリスを凌駕して、世界一の輸出國となり、人絹の生産額も正に世界の首位を占めんとしてゐる。斯くて世界の工業國は驚異の眼を以てこれを眺め、イギリス、オランダ等或は通商條約を破棄し、或は關稅率を引上げ、或は割當制限の方法を講ずる等、これが防遏に日も當ならぬ有様である。而も彼等はこれを以てソシアル・ダンピングだと非難してゐるが、それは實に日本を誣ふるも甚だしい。

新聞は本年上半期の對外貿易が豫想外の好成绩を示し輸出入共に昨年の同期に比し二割に近い増加を示したことを報じてゐる。

斯くの如く日本製品の輸出が、彼等の防遏手段あるに係らず、益々好況を呈し、世界到るところの市場に進出しつゝある所以のものは無論爲替安の影響も多少はある。併し彼等の唱導するが如きソシアル・ダンピングの結果では斷じてない。彼等は日本製品の低廉なるは低勞銀の結果であつて、これ明かにソシアル・ダンピングだと稱してゐるけれども、日本製品の驚くべき進出は、低勞銀の結果ではなく、實に日本人の智能的優越の結果である。而もそれは我國の學問が最近漸く模倣の域を脱して創造に進み、更にその實用的工夫が日本そのもの、特質に適合せしめらるゝに至つた賜である。

今その一例として、最近に於ける日英兩國の紡績機械に就て、その優劣を比較して見る。イギリス産の最優秀品だといふスピンドル一分間の廻轉數は約八千回に過ぎない。然るに日本のそれは一萬二千回である。更に紡績機に至りては、イギリスの男工一人は僅かに四臺の機を受持ち得るに過ぎないのに、日本の女工は一人で四十臺の機を擔當してゐる。即ち日本の女工は

イギリス男工の十倍の仕事をする事が出来るのだ。

而もこの事實はイギリスが機械の改善に何等工夫するところなく、舊態依然たる機械を使用するに反し、我國は日に月に新工夫を凝らし、能率の増進に最善の努力を拂つてゐる結果である。イギリス人は我國紡績の海外進出をソシアル・ダンピングだと稱し、低勞銀の結果、生産費の低廉を來し、外國品を壓倒するのだと非難してゐるが、當らざるも甚だしい。

日本の女工はイギリス男工の十倍の仕事をしてゐる。故に假に一日一人の勞銀は同額なりとしても、生産高に割り當つれば、日本はイギリスの十分の一の勞銀を支拂ふ計算になる。そこに日本の優越性がある。而もそれがソシアル・ダンピングなりと稱するが如きは、實に不都合千萬である。

即ち日本紡績の海外進出は低勞銀の結果ではなく、日本人が知能の優秀さを機械の改善、工場經營の改良、職工の養成等に傾倒し盡した結果である。故に強いていふならば、それはソシアル・ダンピングにあらずして。實にブレーション・ダンピングと稱すべきだ。

併しこの事實を以て直ちに自惚れてはいけない。……『自惚』は萬事破滅の本だ！我等は

ドイツが世界大戦前、この『自惚』に陥つた結果、遂にあの苦難をなめるの止むなきに至つたことを忘れてはならぬ。

日本民族の世界的使命は實に雄大である。而もこの大使命達成には『自惚』が大禁物だ！我等日本國民は何れも『自己の足らざる』を思ひ、たゞ將來に努力を續けなくてはならぬ。

—一〇・七・三—

『親心』と『子心』

大正九年の七月七日！それは丁度十五年前の本月本日であつた。當時臺北在住の僕は、郷里より『祖母危篤』の急電を受取つた。

何しろ九十四歳の高齡！所詮は駄目だらうと考へた。併し僕は公務の都合上歸る譯にゆかずまた家内は身重で長途の旅を許さぬ實情！どうしたものかと思案に暮れてゐると、傍にゐた當年八歳の長男が『僕が代つて行つてあげる』といひ出した。

翌八日は定期船備後丸出帆の日であつたが、彼は頻りに出發を迫るのであつた。併し僕はどうしても、彼を一人で内地に歸す氣にはなれなかつた。

ところが、その日の船で内地に出張する芳賀君がやつて来て『門司までの船中は萬事引受け

る』といふので、初めて決心が出来、二時の汽車で臺北を發たせた。

併しそれでも僕は心ひそかに「基隆に着くまでには氣が變るだらうこと」を願つてゐた。然るにそんな氣配もなく汽車は基隆に着いたので、そのまま船に乗り込ませた。

更に出帆までには、きつと「一人で行くのはいやだ」と云ひ出すだらうと期待してゐたのにそれも水の泡！ 本人は頗る平氣なものであつた。

總て出帆の定刻四時になつた。僕は子供に後髪をひかれながら船を下りた。さうして船は錨をまいて徐かに岸壁を離れ初めた。……岸壁から見上ぐる僕！ 船上から見下す子供！ 子供の顔には何等不安の色も見えないが、僕の心は曇つてゐた。

僕はたゞ一人、遠く離れ行く船を靜かに見送つた。……無論、何者かに子供を奪ひ去らるゝ如うな氣持で！ さうしてその時初めて「親といふものゝ心持」をほんたうに味ふことが出来、更に自分の持つ「親心」を自分で見出すことが出来た。

『子供安着』の電報を手にして、初めてほつとしたが、祖母の葬儀には遂に間に合はなかつた。

父からの音信りによれば、最初の一日だけは非常な元氣であつたが、その翌日はもうすっかり子供心に還つてしまつたらしい。

丁度二日目の眞夜中であつた。子供は床の中で、しく／＼泣き出した。父がそのわけをきくと、子供は「お父さんに會ひ度い」といふのであつた、父は僕の寫眞を取出して、これで我慢せよといつて見たが、子供は「寫眞はいやだ。ほんとお父さんに會ひ度い」といつては泣いた。これには流石の父も閉口したと見えて、誰か早く迎ひによこせといつて來た。……併し僕はこのだよりを読んで、これがほんたうの「子心」だと思つてうれしく感じた。

大正六年に長男を連れて財部に歸り、再び臺灣に歸任する時であつた。祖母は玄關口で家内の手をしつかと握り「長男は東郷家の世繼になる大切の子供！ どうか立派な人物に育て上げて下さい、頼みますぞ！」といつた。

祖母の眼には玉の露が宿つており、その聲は震へてはゐたが、實に力強いものであつた。さうして僕がこの世で祖母から聞いた最後の言葉は、即ちこれであつた。

斯くて八歳の子供が、親の代りに歸つてやるといひ出したのも、かうした祖母の「魂」が彼

を誘導したのではないかとさへ思つた。

子供は八月六日に亞米利加丸で歸つて來た。彼の元氣な姿を基隆の岸壁に迎へたとき、「旅はさすもの、さすべからざるもの」といつた如うな矛盾した氣持で僕の胸は一杯になつた。さうしてそれと同時に、僕が初めて東京に上つた當時のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。

僕は十四歳の時、父に連れられて上京の途に就いたが、東京から神戸まで迎ひに來て呉れた従兄に萬事を頼んで、父は大阪から下車して國に歸つてしまつた。別れにのぞみ、父は僕の頭を撫でながら「しつかり勉強して立派な人間に成れ!」といつた。さうして車窓の外に立つたまゝ、靜かに見送つて呉れた父の顔には確かに不安の色がたゞよつてゐた。

父に別れて汽車の初旅! 子供心には人知れぬ淋しさを覺えた。さうして「しつかり勉強して立派な人間に成れ!」といつた父の言葉を時々思ひ出しながら旅を續けた。併しその時の父のほんとの「心持」は子供心には解する由もなかつた。

ところが、僕自身、内地に旅立つ八歳の我が子を、基隆埠頭に見送つたとき、初めて僕は二十有六年前に、大阪驛頭に僕を見送つて呉れた時の父の「心持」がよく解つた如うな氣がした。

「子を持つて初めて知る親の恩!」、「親を思ふ心にまさる親心!」親のありがたさは、子を持つて初めて知ることが出来る。

—一〇・七・七—

『雪隠詰』になつた話

今日は土用の入りだ。……二、三日來幾分涼しかつた東京も、まためつきり暑くなつて來た。併し暑いのが夏の持前であり、また農作物の爲めでもある、故に暑いところにほんとの夏はあ
るのだ。

204

南洲翁の書に『人皆苦炎熱、我愛夏日長』といふのがあるが、僕も又夏の日長を愛するもの
の一人だ。併しこの暑さに鹿爪らしい理窟は禁物！今日は少し變つた方面に筆をすべらして
見る。

僕は元來無器用に生れたものと見えて、スポーツが不得手だ。従つて少年時代から、スポー
ツで賞品を貰つたためしは、たゞの一度もない。

嘗て太平洋航路の船中で無理やりに運動競技に引つ張り出され、『シガレット・レース』で
不思議にも僕が第一着！併しその時でも、賞品は僕の相棒になつた美しいアメリカ娘のミス・
ローランドが一人でせしめた。故に僕は結局『骨折り損の草臥れもうけ』をしたといふに過ぎ
なかつた。

學生時代から役人時代にかけてテニスを少しばかりやつて見たが、これも上達の見込みなく
遂にやめてしまつた。

205

近頃ゴルフを勧める人もあるが、これも上達の見込みなしと思へば、到底やる氣にはなれぬ。
併しゴルフといへば、僕には忘るゝことの出来ない臺北時代の思ひ出がある。それは丁度大
正七年の夏の出來事であるが、當時の臺灣新聞に『東郷技師雪隠詰の一手』と題する記事がの
つてゐたことがある。今それをそのまま拜借に及べば次の通りである。

先日來、東郷技師の顔色が馬鹿に黄色く見ゆるばかりでなく、どうもアンモニヤの臭がする
といふ噂があるので、その謂れ因縁を探つて見るとかうだ。

過ぐる土曜日の午後、ゴルフ狂の井上絳育、及松岡南洋の兩君が、いやがる東郷君を無理や

りに自動車に乗せて練兵場へと運んで行つた。そこには先着のゴルフ狂藤野糖務が、弟子入志願の堀内養蠶と共に待ちかまへてゐた。

ところが天無情！ 練兵場に着くか着かぬに、一天俄にかき曇り大雨がドッと降り初めた。機を見るに敏なる東郷君は時を移さず、近所の辻便所に避難したが、残りの四人は濡れ鼠となつて、ボールを打ちながら練兵場を奥へへと進んで行つた。

東郷君は司令長官が司令塔の中から日本海の大戦を指揮してゐる様な氣持で、便所の窓から長い首を更に長くして見てゐると、四人のものもたうとう堪らなくなつたと見へ、苦力小屋を占領して、その中に避難したつきり、何時までたつても出て来なかつた。

雨は益々激しくなり、雷鳴さへ加はるといふすさまじい勢ひ！ それから物の二時間も経過した頃、苦力小屋の連中が、急に東郷君の身の上を案じ初めた。そこで井上君が使者の役を承つて、雨を冒して便所に駆けつけて見ると、東郷君は、制服、制帽、帯剣のまゝ、直立不動の姿勢で依然便所の中に無言の行を仕すましてゐた。併しその時はもう氣の毒な程、顔の色が黄色くなつてしまつてゐたさうだ。

井上君が臭いのを我慢しながら、東郷君を便所から救済に及ぶと、東郷君始めてニコ／＼しながら「君！ 雪隠詰といふ一手は日本の將棋だけかと思つたら、舶來のゴルフにもあるから面白いね、アッハハハ……」は振つてゐる。

この新聞記事は當時の光景を如何にもよく描寫してゐる。さうして濡れ鼠の様になつた四人の哀れな姿！ 更に雪隠詰になつて黄色くなつたといふ僕の顔色！ それ等のことを考へると僕は今でも吹き出さずにはゐられない。併し僕が今頃こんな馬鹿げたことを書くのも、その中には尊い多くの教訓が含まれてゐるからのことだ。

即ち人の一生には到る處に「雪隠詰」の難所が横はつてゐる。故に人生には雪隠詰にならぬだけの努力が常に必要だ。……併し一旦雪隠詰になつた場合、平然としてそれを突破し、更に前進を續けるだけの餘裕と勇氣とを持つてゐることは、より以上に必要なことだ。

國際的大冷汗

明治四十四年の夏、當時ベルリン大學在學中の筆者は、デンマーク旅行の途についた。

その途中汽車のなかで同席した六十歳位のデンマーク紳士が、日本人と始めて話をするこゝろは大きな喜びだといつて、筆者にデンマーク視察の目的を質ねた。

そこで筆者は「理想の農業國デンマークの真相、特にその教育及び産業組合の經營を研究するためである。」

と答へた。紳士は非常な親切をもつていろいろの話をしてくれたが、最後に彼は、

「デンマーク國民が三十年苦心努力の結果つくり上げた産業組合をお前はたつた三時間で盗みとるのだ、日本人は精巧な國民だと、かね／＼聞いてはゐるが、ほんたうにその通りだね。」

といつた。

彼は別に皮肉を言つたわけではないが、聞いた筆者は、全く文字どほり冷汗背をうるほすを覺えた。めつたに冷汗を流したことのない筆者も、この時ばかりは、國際的冷汗にすっかり参つてしまつた。

考へて見ると、日本人ほど盗みの上手な國民は世界にも少からう。明治維新以來七十年の長きに亘り、西洋模倣に終始一貫して來たのが我等日本國民である。模倣といへば頗る上品にきこえるが、ひらたくいへば、「模倣とは盗みを意味する」のである。

我が國現下の國難打開の第一歩は、先づ以てこの泥棒根性を一掃することから初めなければならぬ。茲に於てか筆者は祖國日本の更生のために「模倣を排除せよ」と叫ばざるを得ないのである。

服装から心理へ

僕は夏の國に生れ、冬の國に學び、更に夏の國につとめたものである。故に寒い國暑い國を
れん／＼思ひ出は多い。併し今日は一つ沖繩に旅した時の思ひ出を書いてみることにする。

沖繩は僕の郷里鹿兒島とは地理的にまた歴史的にその關係は極めて密接である。併し僕が初
めて沖繩に旅したのは大正十五年の五月であつた。

當時臺灣總督府在職中の僕は、『植民政策と民族心理』に關する研究が一段落を告げたの
で、僕の學的研究に信念づけるに必要な資料を得んが爲めに沖繩に旅した。

臺灣生活に慣れた僕の目には、同じ夏の國たる沖繩の風物は、それ程めづらしくもなかつた。
併し『所變れば品變る』といふのが普通であり、色々の點に就て物めづらしく感じたこともな

いではなかつた。

その中でも一番僕の目を引いたのは服装の點であつた。特に婦人の服装は一見したところ極
めて不用心に思はれた。

僕はこの點を先づ或人に確かめた。併しその人は「外見はいかにも不用心に見える。併しそ
の實、凡ての婦人は下にドジンカ、ンと稱する股引様のものをはいてゐるから他府縣の婦人達
よりは遙かに用心はよい」と説明した。

僕はこれを聽いて「成程さうかなア」と思つた、ところが或他の人の話によれば「それは中
流以上の人のことで、農村の女達になると、丁度他府縣の男のする越中褌を逆にした様なもの
を用ゐてゐるのも少くない」といふ。

更に或他の人の語るところによれば「近頃辻―遊廊―の女達の中には内地風の腰巻―赤褌―
をするものが殖えて來た」とのことだ。……「何事も流行は花柳界から」といふ言葉もあるか
ら、それもほんたうだらうと思つた。

婦人の服装の一部に就て考へても、こんな風にその説くところが人によつて同一でない、無

論この人達のいふところは凡て事實であるに相違ない。

併し、僕が單にその中の一つ丈けを聽いて沖繩の婦人はドジンカ、ンといふものをはいてゐるから用心がよいとか、或は越中禪を逆にした様なものを用ゐてゐるとか、或はまた近頃は内地風の腰巻を盛んに使用してゐるとか吹聴したとしたならば、それは大きな間違ひで、決してその全體を傳へたものではない。ところが世の所謂旅行談とか視察談とかいふ奴には、そんな間違ひがさらにある。

先年比律賓に旅行した時のことである。或日K君と汽車でマニラを出發した。すると沿線の田には青々とした作物が植ゑてある。K君が、「あれは何の作物か」と僕にたづねた。

農學士たる僕が知らんといふわけにはゆかぬ。そこで僕は「あれは水稻だよ、日本の稻作とちがつて、アメリカ式の機械で直播したものだから、株植ゑになつてゐないのだ」と答へた。事實僕はさうだと思つたからだ。

然るにその後數日にして總督府の獸醫課長W君—アメリカ人の案内で自動車を驅つてマニラ郊外に出かけた。ところが過日僕が水稻だと思つてゐた作物を頻りに刈取つてゐるのが目に

ついた。「さて變だなア稻の青刈もない筈だが」と考へながら。W君に疑問を質した。W君は「あれはサカテといふ牧草だ。この邊では水稻を作るよりはサカテを作つた方が遙かに經濟的なんだ」と説明して呉れた。

僕も農學を學んだものだ、従つてサカテといふ牧草の名は知つてゐる。併しその時まで實物を見たことはなかつた。……これを聽いて僕は過日得意になつて水稻の説明したことが恥しくなつた。

僕が獸醫課長よりサカテの説明を聽く機會なくして臺灣に歸つたとしたならば、相變らず得意になつて「流石はアメリカだ比律賓では水稻の機械播を實行してゐるよ」と吹聴したにちがひない。

僕は沖繩婦人の服裝問題に遭遇したとき、嘗て比律賓で出會つたサカテ問題を思ひ出して、こゝだと思つた。

女の服裝一つでさへほんとのことは一人一人尻をまくつて見なければ分らない。併し尻をまくつて見るまでの親しみは、通り一遍の旅人にはあり得ない。況んやその胸深く包まれた「心」

をすつかりつかむが如きは容易のことではない。……異民族統治の大任に當る人達には、先づ以てこの眞理の會得が何よりも必要だ。即ち僕が常に植民政策の民族心理學的研究の必要を主張する所以もそこにある。

—一〇・六・一三—

硫 黄 谷

我國の政治家は善惡兩面の意味に於て、餘りに動き過ぎる。寧ろ彼等には殆んど靜思の時がない。明け暮れ策動をこれ事とする彼等の多くは靜思の時を作らんとする意志だも有しない。また世人も彼等に默想の時を與へようとはしない……たゞ自分だけ獨りでゐる時を持たない政治家の生活は實にみじめなものである。

我國に創造的政治の生れ得ないのもまた雄大なる國策の現れ得ないのも、所詮はこゝにその病源を發してゐる。

實行に先立つて靜思し、活動に先んじて默想せよ！これが今日の政界を淨化し、政治を人格化し、次で雄大なる創造的政治を我國に確立する所以ではないだらうか。……故に僕は可成

静思黙想の時を得たいと努めてゐる。

僕の郷里は鹿兒島だ。さうして同じ鹿兒島でも大隅の一農村だ。高千穂高原の一部を占めた僕の郷里財部は海から可なり離れてゐる。従つて僕は幼少の頃から山に親しんだ關係もあらうが今日といへども海よりは山の方が好きだ。

僕の郷里鹿兒島には温泉が多い。併し僕はその中でも指宿温泉よりは、霧島温泉の方が好きだ。それは前者が海の温泉であるのに後者が山の温泉であるからだ。

僕は昨年夏、八月末から九月始めにかけて郷里に歸つた、それは縣下の旱害を視察し、これが對策を講ぜんとするのが目的であつた。さうしてその際貰ひ受けた各種の材料を靜かに讀み、靜かに考へ、これが救済策の實現に對する自分の肚を決めて東京に歸り度いと思つて、ただ一人霧島に登り、硫黄谷温泉に一日を暮した。

本年もまた五月末より六月初めにかけての初夏を郷里に歸つた。さうして再び僕は人を避けて霧島の温泉に上つて行つた。

暑中休暇にはまだ間のある初夏の温泉場は浴客も餘り多くはない。さうして山の静けさは太

古そのままの姿である。無論溪流のせまらぎはある。併し新緑に包まれた湯の街の初夏は至つて静かだ。……冥想に耽るには持つて來いの環境だ。僕はこゝに二日の間、靜かに讀み、靜かに考へ、更に靜かに書き、また靜かに寝た。

僕が硫黄谷温泉に泊るのは、今度が丁度三度目であつた、而もその第一回は今から三十四年前の夏のことであつた。さうしてそれに就て僕には忘るゝことの出來ない思ひ出がある。

明治三十五年の夏八月、當時札幌農學校在學中の僕は胃擴張を患ひ郷里に歸り、保養の爲め弟妹二人を連れて、こゝに湯治したことがあつた。

今でこそ郷里財部からは汽車と自動車でわけもなく來られるが、その當時は交通が極めて不便であつた。即ち徒歩財部を出で、西岳から霧島神宮を経て、明礬に下りて來たものであつた。

最初明礬温泉に滞在の豫定であつたが自炊部屋が満員だといふので拒絶せられた。止むなく硫黄谷に下り、漸く四疊半一間の自炊部屋を借りることが出來た。部屋は壁も天井も煤煙で眞つ黒に燻つてはゐるが、それでも部屋にありついた兄妹三人は安心して、ほつと一息ついた。

ところが夜になつて寢床にはいると今度は思ひがけなくも蚤の襲撃に會つて一睡だもするこ

とが出来なかつた。翌朝起きて見ると、三人の身體は蚤に喰はれ、丸で癩疹にでもかゝつた様に全身に亘つて眞つ赤な斑點が残つてゐた。妹が入浴するのにきまりが悪いところばしたのもやさしい女心の無理からぬことであつた。

斯くて僕達は蚤と戦ひ続けながら豫定の湯治を終へて歸つて行つたが、その後も時折蚤に喰はれた當時の思ひ出を語つては打興じたこともあつた。

昨年三十三年ぶりに行つて見ると、その思ひ出多き部屋は今も尙ほそのままに残つてゐた。さうして僕はその部屋の前に立つて靜かに當時を追憶して感慨禁じ難きものがあつた。

本年も僕は、その部屋をのぞいて見た。さうしてそこには一人の正直さうな老人が心靜かに夕餉の箸を執つてゐた。丁度それは三十四年前に僕達三人が、何時も仕てゐたと同じ様に！

一番年下の妹と年上の僕とは今でも健在であるのに、弟は十一年前に四十四歳を一期として夙くも逝つてしまつた。

弟病篤しとの急電に接し、東京から急いで歸つて來た時は、もう彼の容態は臨終に近かつた。彼は父と自分とに何かと遺言もした。さうして最後に『もうこの世には何も思ひ残すこと

はない。併したゞ一つ、兄上が〇〇〇〇たるの日を待たずして死ぬのが残念だ』といつた。

彼は僕が初めて政界に乗り出した大正十三年の總選舉には、病床に横はりながら、専ら劃策の任に當つて呉れた。僕の當選は彼に負ふところが可なり多かつた。彼は病軀を抱きながらも常に兄の將來を心から案じて呉れた。さうして彼がこの世に残した最後の一言も所詮は彼のいづはりなき眞情の發露に過ぎなかつた。

爾來正に十一年！ 而も尙ほ依然として『陣笠の群』を脱し得ないこの身を硫黄谷に運び、自炊長屋の一室で蚤に喰はれた三十四年前の夏の日を回顧すれば、在りし日の弟の面影が髣髴として眼前に浮び出で、人生の奇しき運命を物語る様な氣がしてならぬ。

過去の思ひ出！ 無益なるが如くにして、その實は人間將來の活動に大きな刺戟を與へるものだ。……而も故郷の夏の思ひ出！ 蚤に喰はれたその日の思ひ出！ 僕に取りては特にそれが大きな刺戟の一つだ。

近頃不愉快に思ふことの一つは、日本の國旗がローマに於てイタリア國民の爲めに侮辱されたといふ事實だ。

新聞電報に依れば、彼等は日英兩國の國旗をファッショの斧で切り刻んだ圖を擔いで、街頭を練り廻り『打倒エチオピア』と共に『打倒日本』『打倒イギリス』のスローガンを掲げたといふ。而もそれがエチオピアに對する戦争熱の飛沫だといふに至つては、『血迷つたかファッショの國民!』といひ度くなる。

イタリアのエチオピア遠征はファッショ没落の第一歩だといふ人もある。若しさうなれば、單りエチオピアの仕合せであるばかりでなく、それは實にイタリア自身の幸福でもあらう。……

それにしても、私達はこの際、特にファッショに對し再検討の必要を痛感する。

我國ではファッショを直ちに『獨裁政治』だと考へてゐる向も少くない。併しファッショそれ自体には獨裁政治の意味はない。

イタリア語のファッショは『結び束ねたるもの』といふ意味だと聞く。即ちファッショは一致團結を意味し、舉國一致の精神を表徴したものである。而もムッソリーニが、この目的達成の爲めに、獨裁政治の形式を採るに至つたのはイタリアの國情がそれを必要としたからである。

故にこれを以て直ちに『ファッショ則獨裁政治』と解するのは當を得てゐない。

先年イギリスが財政の行詰り打開の爲め、舉國一致の政治を必要とした際でも、イギリス國民は決して獨裁政治を要望しなかつた。さうして依然として政黨政治に立脚したマクドナルドの聯立内閣が出来上つた。而もこれがイギリス國民の事情に則した最上の政治形式であつたことはいふまでもない。……だから『舉國一致』と『獨裁政治』とは別個のものであつて、ファッショ本來の意味は、決して獨裁政治そのものではない。

日本人は兎角外國の眞似をしたがる。イタリアにファッショが起れば、直ちにこれを禮讚し、

またドイツにナチスが勢力を占めれば、ナチスならでは夜も日も明けぬといった様な調子！
日本は果してそれでよいのか。

イタリア語の「ワッショ」が「結束」を意味するならば何も假名書の外国語でなくとも、日本には立派な日本語がある筈だ。併し強いて「ワッショ」に發音の似通つたものを求むるならば我國には「ワッショ！」がある。

「神社」は日本特有のものであるが、その神社のお祭には必ず氏子達が揃ひの着物で、お神輿を擔ぐ。殊に彼等が一團となつて「ワッショ！」「ワッショ！」の懸聲勇ましく街頭を練り歩いてゐるばかりでなくお神輿を中心に、すべての力を凝集せしめ一糸亂れざる團結の姿を表現したところに「結び束ねたるもの」の大精神を躍如たらしめてゐる。さうして私達はそこにほんとの結束した「日本精神」を發見することが出来るではないか。

日本の國に必要なのは、「ワッショ」にあらずして、「ワッショ！」だ。さうして私達の使命は更により大なるものがある。

畏くも聖天子が「現人神」として召し玉ふお神輿は、大日本帝國といふ大きなお神輿だ。斯くて氏子としての九千萬國民が心も身をも打つて一團と成り、結び束ねた大きな力を形作つてこれを擔ぎ奉り、「ワッショ！」「ワッショ！」の氣合勇ましく練り進むとき、天下いづこにか、これを防たげ得るものがあらうぞ。……さうしてそこにほんたうの日本の姿があり、日本民族の大精神があるではないか。

「ワッショ！」それはイタリアのものであつて、日本のものではない。

ナチス！ それもドイツのものであつて、日本のものではない。「ワッショ！」たゞこのみが眞に日本のものである。故に祖國日本の躍進的發展の大道は、これを「ワッショ」に求めずして、「ワッショ！」に求めなくてはならぬ。さうだ！ 日本には「ワッシャ！」だけあれば、それで澤山だ！

【汗】と【氷】

夏は暑い！ さうして夏には氷がつき物だ。昨今東京市民が一日に消費する氷の量は二千トンを突破してゐる。故に夏は氷が一人で巾を利かす世界だ。それにしても僕には氷に就て忘れることの出来ない二つの思出がある。

僕は明治二十七年の五月に初めて東京に上つたが、その頃の中學は一年に這入るにも英語の試験があつた。然るに僕は英語を少しも知らなかつた。故に着京直ちに、三田四國町の私塾に通つて、A、B、Cから稽古を始めた。

僕のゐた高輪の二本榎から四國町までは、相當の距離があつた。併し交通機關の發達してゐない當時のことであるから、毎日徒歩で往復した。

而も第二學期には中學へ這入り得るだけの英語を速成的に教はらうといふのだから、僕には休みも何もあつたものではなかつた。

間もなく夏が来て、焼芋屋が氷店に變つた。僕は氷水が好きで、今でもよくそれを飲む。まして當時十四歳の少年！ 汗だく／＼で歩きながら氷店の前を通るのだから、氷がほしくて思はず喉が鳴つたものだ。併しさう矢鱈に氷水の飲めないのが自分の境遇であつた。故に僕は眼を閉ぢたまゝグッと唾を飲み込んで、氷店の前を駆け通つたことも、一度や二度ではなかつた。僕はその頃郷里から毎月五圓の學資をもらつてゐた。その中で四圓は食費に取られ、残りの一圓で月謝を拂ひ、風呂に這入り、散髪もしなければならなかつたが、その外にも何かと小使ひがいつた。——だから一杯一錢五厘の氷水でも、さうたやすく飲めるわけのものではなかつた。

そこで僕は自分の財力から割出して、氷水を飲むのを一週一度に決めた。さうして一度飲んだが最後！ 次の一週間目を楽しみに毎日／＼汗だくになつて歩かねばならなかつた。

斯くて一週間目毎に氷店に這入り、赤毛布の敷いてあるベンチに腰をかけ、一杯の氷水に舌

鼓を打ちながら、一週間の汗をすっかり忘れたときの嬉しかつた氣持は今でも到底忘るゝことが出来ない程のものであつた。

一週一回、一錢五厘の氷水なら、月には四回、たつた六錢に過ぎない。……故に今から考へると、實にお恥しい様な話だ。併しその頃の僕達は刻苦缺乏に堪ふことが、人間修養の一つだと教へられてゐた。だから學資の如きも、成るべく親に迷惑をかけない程度に切り詰めて貰つてゐた。さうして少年時代のさうした忍耐努力は、その後の僕に取りて、決して無益ではなかつた。

人間の「克己心！」それを養成するには、かうした努力も、少年時代には確かに必要だ。

その次は僕の臺灣時代における出來事だ。大正八年の夏の暑い眞つ盛り！或日僕は臺北の大通りで、六十歳位の臺灣人苦力が荷車に「氷」を満載して曳いてくるのに出會つたことがある。……氷といへば、聞いただけでも涼しさを感じる。然るにその老苦力の額からは大きな玉の汗がぼたり／＼と落ちて居り、彼の顔は丸で火の如く眞赤にほてつてゐた。

僕はあの冷めたい氷にも、かうした熱い汗の努力が潜んでゐることに氣がついたとき、その

老苦力に對して感謝無限の涙を禁じ得なかつた。さうしてそれと同時に自分が嘗て汗の努力一週間にして、初めて一杯の氷水に有りつくことを楽しみにしてゐた少年時代を思ひ出さずにはゐられなかつた。

「汗と氷！」冷めたい氷も、所詮は熱い汗の努力の結晶に過ぎない。……斯くて人生は凡て汗の努力だ。

汗の努力と、それに對する感謝の心！これさへあれば、人間は常に冷熱を超越して、安心立命の境地を楽しむことが出来る。

『天業』を恢弘せよ

僕は今歸省の途中、日豊線を南下しつゝある。この線は鹿兒島本線の急行よりは、汽車が悪く、トンネルは多く、おまけに各驛停車といふのだから堪らない。併しそれでも、西廻りに比ぶれば、乗換なしに一時間も早く郷里に歸り着くといふ便利がある。

神武天皇が美々津港から遍舟に掉して萬里東征の途にお就き遊ばしたのは、今から二千六百年前の十月五日であつた。故に當時の御難儀に比すれば、今の汽車旅行は樂なもの、それに不足などいつては罰が當る。

汽車が美々津附近を通過したのが丁度午後の四時過ぎであつた、僕はあの美しい美々津港の風光を窓外に眺めながら、靜かに二千六百年前の遠き昔を思ひ浮べて見た。

神武天皇は東征の御宣言中に「天業を恢弘して天下に光宅せん」と仰せられてゐる。

「天業」とは天の心を以て人間文化の中心とする爲めに、それを營む業であつて、今日の言葉でいへば「精神文化の建設」である。

而もこの精神文化は單に日本内地のみに限らず、普くこれを全世界に押し廣め、全人類の幸福を平等に増進し、世界平和の大殿堂を我等日本民族の手によつて建立せんとするのが、神武天皇肇國の大精神であつたことは、これを「恢弘して天下に光宅せん」と仰せられたるに徴するも明かである。即ち神武天皇は斯くの如き廣大無邊の大理想を遍舟に托しながら、我等の祖國三州の地を御出發遊ばされたのだ。

斯くて六年の後、大和の國に國都を御定め遊ばされたが、その際發せられた大詔中に「上は即ち乾靈國を授けたまふの徳に答へ、下は即ち皇孫正を養ひたまひし心を弘めむ」と仰せられてゐる。さうして天皇の大御心は「養正」の語によつて極めて明瞭に拜察することが出来る。即ち「正」は人格統一の實現である。だから天皇肇國の大業は「人格」を基礎として遂行せられたのであつた。

更に天皇は右の大詔中に「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩うて宇と爲す、亦可からずや」と仰せられてゐる。これは人類同善、四海一家の大理想を特にお示し遊ばされたものであつて「天業恢弘」の大精神が益々明徴にされてゐる。

ところが明治維新以來、日本國民がこの大理想、この大精神を打忘れ、たゞ徒らに西洋の物質文化を模倣攝取したところに、今日の行詰と憫みとがある。即ち我國が過去七十年の間絶えず知識を世界に求めて來た態度は、開國進取の國是に則したもので、一見極めて積極的に見え、併し實際は我等の祖先が夙に創建した精神文化を普く世界に押し廣めんとする積極態度から一變して、彼等の完成した物質文化の分與を受けることのみを終始一貫するの消極的態度を持續して來たところに今日の憂ふべき世相の病根を發見する。

故に今日の急務は、都市中心、黄金萬能、享樂第一主義に偏した物質文化の時弊を一掃し、國民生活の基礎を肇國の大精神たる「養正」に求め、道德を先にして功利を後にし、物質に先立つに精神を以てし正道を踏んで大義を行ふといふ日本古來の大精神に復活更生することである！

而もそれには「天業恢弘」の大精神に基き、内に在りては飽くまでも農村の保全に努め、外に向つては盛んに海外發展の大經綸を行ひ、全人類に日本文化の恩惠を施し、以て世界平和の大殿堂を建立するといふ肇國以來、我等日本民族の有する世界的大使命を達成するよ。他に途はない。

僕は汽車の進みをも忘れながら、遠く三千年の過去を思ひ、更に三千年の將來を考へて見た。さうして三千世界に、たつた一つしかない「永遠の國日本」のほんたうの姿をそこに發見することが出來たやうな氣がした。間もなく汽車は都城平野を走つてゐた。さうしてそこに夕空高く聳え立つ神代さながらの靈峰高千穂の偉容を望み見たとき、僕は思はずも「これなる哉！」と叫んだ……如何となれば、歴史は常に我等國民に奮起を教へて呉れるからである！

どう考へて見ても、三州の天地は雄大であり、三州の歴史は悠久である。この天地に生れ、この歴史に育まれた三州の青年諸君！ 諸君の起つべき秋は今だ！

さうだ「永遠の國日本」のみが持つ世界的大使命——「天業恢弘」の聖業——達成の爲めに！

西 瓜 畑

昨年旱害調査に歸縣した際には各地到る處で西瓜攻めに會つた。併しこれは縣下の西瓜作が近年驚くべき發展を遂げた反證だと思へば悦しくもあつた。

ところが最近新聞紙は「本年は八代西瓜を完全に驅逐して、縣産品に凱歌があがり、自給自足の域に達した」ことを報じてゐる。殊にお盆を過ぎてからは、西瓜の洪水と成り、鹿兒島市内の各市場に殺到し、毎日二萬玉以上の賣買が行はれ、一玉十錢から七、八十錢だといふ。……それにしてもこの氾濫！ この安値！ 生産農家はたゞ悲鳴を擧ぐるの他はあるまい。何も西瓜に限つたことではないが、凡て農産物は販賣統制が特に必要である。自給自足！ 無論必要だ。併しその次に來るものは「生産過剰」である。若し縣下の西瓜生産がその域

に達したといふならば、これが販路に就て速かに策を講ずることが、農家のために特に必要だ。

僕達の少年時代にも無論西瓜畑はあつた。しかしその産額は知れたもので、子供等の口には容易にはいらぬ程度のものであつた。……だから深夜ひそかに西瓜畑を冒した村の若衆達が、よく番人につかまつた話を聞かされたものであつた。併し西瓜の洪水に悩む程の今日では、そんな不心得者は一人もないと信ずる。

僕が札幌在學當時のことである、或年の夏郷里に歸つて來た僕は或日弟や従弟等を集めて、大に札幌の自慢話をした。

あの雄大なる北海道の自然！ 更に札幌農學校の優秀なる校風！ 何れも自慢の種であつた僕は更にクラーク先生が歸國に際し、馬上豊かに残して行つた名句「ボイス、ビー、アンピシヤス！」を説いて弟達に大志、大望あれと希望した。さうして最後に「當時の學生が農場實習の際空腹を訴へると、クラーク先生は、自分が嘗て南北戦争に従軍し、二日も、三日も食はず飲まずに戦つた體驗を語り、一度や二度飯を食はないからといつて空腹を訴へるやうでは、明

日の日本を擔當することは出来ないぞと教へた」といふ話を引用して、人間には常に「空腹に打ち克つだけの修養」が必要だと説いた。僕は晝飯を食ふのも打ち忘れて大に吹いた。聽て弟達は「溫和しく話を聽いてやつたかはりに、西瓜をおくれ!」といひ出した。「よし、おこらう! 晝飯等食はんでもよい。直ちに西瓜畑に行かう!」といつて三人は出かけた。

ところが、行く先々の西瓜畑が悉く賣り切れで食ひ頃の西瓜が一つも無いといふのが運のつき! 暑い眞夏の畑を辿りながら、ありつただけの西瓜畑を、あちこちと尋ね廻る内に、僕は目がまいさうになつて來た。而もそれは空腹の結果であることに氣が付いた時僕は殘念で堪らなかつた。併し何と我慢して見ても、おしまひには歩けなくなつて、松並木の下に腰をおろしたまゝ動かうともしなかつた。

二人の者は心配さうに「どこか悪いのではないか」ときいた。「いや何でもないが、腹が空つて歩けなくなつたよけのことだ」と白狀に及べば、二人はドッと笑つた。「何だ! いくら強さうなことをいつても、兄さんのは机上の空論! そこになると僕達のは無言の雄辯! これこの通りピン／＼してゐる」といつて、二人は俄に威張り出すのであつた。

いくら威張られても事實その通りだから仕方がない。併し家に歸つて飯を食つたが最後——僕は再び元氣を恢復した。「僕は胃擴張を患つてゐるから腹に貯へがないのだ。さあ來い! 食べさへすれば、お前達に負けるものか」と力んだことのあるのを思ふと、今でも吹き出し度くなる。

「健全な精神は健康な身體に宿る」のが普通だ。いくら氣丈夫でも、健康がそれに伴はなければ、力負けがして役に立たぬ。……僕は西瓜畑の無駄廻りをして、この貴い體験を得た。さうして一日も速かに「胃擴張」を根治しようと努めたが、それは容易なことではなかつた。併し多年の努力空しからず、その頃瘦驅鶴の如くなりし身が、今では二十貫もあるといふ大の男に成り得た。而も二度や三度飯は食はずとも、尻古垂れないだけの自信も出來た積り!

人生には無論「勉強」が必要だ、併しそれよりもつと必要なことは「健康」だ! 故に西瓜でもウンと食つて健康保全に努めることだ。

「健康第一主義!」それが明日の日本にとりては特に必要だ!

死ぬのは卑怯

私がジャヴァの視察を終へ、シンガポールに向けバタビヤの港を船出したのは、大正二年一月四日の午後であつた。

船客の中にドイツ人らしい三人の姉妹があつた。何でもジャヴァで看護婦を努めてゐたものらしく三人揃ひの着物を着てゐた。それが如何にも人生の闘ひに疲れ切つたやうな面持をしてゐたが、よく三人集つて靜かにバイブルを讀んでゐるのが目についた。

然るに今日はシンガポールに着くといふ六日の朝になつて、三人の姿が見えないのを不思議に思つてゐると、ボーイがやつて來て昨夜深更三人の者は投身自殺をしてみましたことを話して呉れた。

私はこの話を聽いて成る程と思つた。あのやつれ果た妻から考へて見ても、彼女達の渡り來つた人生の海は可なり浪が荒かつたに違ひない。故に彼女達が赤道直下に横はるあの平靜鏡の如き紺碧の海に安住の地を求めたのは無理のないことかも知れない。

併し死ぬ程の決心があれば、渡り行く人生の海は、よし浪荒くとも、それを乗り切れない筈はない、それなのに死ぬとは、まことに氣の毒な人達だと思つた。さうして同情の涙禁じ難きものがあつたが、それでも私は眞に「死ぬのは卑怯だ」と思つた。

日本人は一體に自殺をしたがる國民のやうに思はれる。嘗て藤村操といふ人が「巖頭の感」を書き残して華巖の瀧に投身自殺をしてからといふものは、猫も杓子も華巖に飛び込むといふ騒ぎ!

また嘗ては淺間山の噴火口行が大流行を極めたものであつたが、最近では三原山が押すな押すなの大繁昌! 併しこんな馬鹿げた流行は、何とかして阻止したいものだ。自分の貴い生命を自分で無くしてしまふ人達には、いふにいはれぬ苦しい事情もあつてのとだらう。併しどんな事情があるにしても、自殺は依然として一種の罪惡である。

私達は決して死を怖れてはならぬ。併し死は求むべきものではない。故に自殺はどんな事情があるにしても、結局「死ぬのは卑怯」であることに變りはない。

近頃愉快に思ふことの一つは、過般東京に於て十歳の少女が死場所を探し求めてゐた一人の男を「死ぬのは卑怯よ」の一言を以て、死を思ひ止まらしめた出来事である。

この少女は失そうした父親を母と共に探し求めて田舎から東京に出て來てゐるものであるとのことだ。更にその男は妻に先き立たれ、男の手一つで子供達を世話してゐるが、生活難からの逃避を企てたものであるらしい。

人間は案外弱いものだ。故に自分の生活力がおとろへ切つた場合には、無責任にも逃避を思ふのである。即ちこの男もその一人であつた。自分の死後残された子供達が、どんなみじめな運命に陥るかも打忘れて死を思ひ立つたのがこの男であつた。

「あたい達がどんなに困つてゐるか、それを小父ちゃんが見つたら、とても死ねやしないわ！」といつて、父無き自分達のみじめさを言外にいひ現したのが、その少女であつた。失そうしてゐる自分の父親が、どうか無事でゐて呉れよばよいがと思ひ續けてゐる少女の眞

心こめたこの言葉に、生活の闘ひから逃避せんとしてゐた一人の男は完全に呼び戻されてしまつたのである。

死の一步手前！　そこで踏みとどまることの出來た男こそは、實に仕合せ者であつた。否それよりも、もつと幸福であつたのは、その男の子供達であつた。

世の自殺者にはこの男と同じ様な事情のものが可なり多いことであらう。併しその人達の多くは不幸にして死の一步手前で、あの様な可憐な少女に廻り會はないだけのことだ。……さうしてそこに何時までも無益な死の存在があるのだ。

「死ぬのは卑怯！」これは實に偉い言葉だ。而もそれが十歳の少女の口から出たのだと思ふと、更に一層の力強さを感じる。

「死ぬのは卑怯！」これは世にも氣の毒な少女の口を通して聽くことの出來た「天の聲」であり、「神の言葉」である。……然り、人生は凡てこの一語に盡きてゐる！

雨

この兩三日は雨続きだ。さうして氣温も例年よりは七、八度も低いといふ。……いくら秋になつたとはいへ、これでは少し涼しさが過ぎる。

昨日白服で本部に出かけた。すると口の悪い連中が「オヤ！ 白服か、丸で鹿兒島から今着いたといはんばかりの出で立ちだが、それで寒くはないかね」と、ひやかすのであつた。それにしてもこの涼しさ、作物に害がなければよいが！

嘗て一代の奇傑伊達政宗が千代田城かどこかで澤庵和尚に出會つた際「雨の降る日は天氣が悪いといふが、いかゞで御座るな」と訊ねた。すると和尚も「雨の降る日は天氣が悪う御座るな」と、同じやうなことをいつたまい、要領を得ずに二人は別れた。

それから後のことである。或日政宗が郷里仙臺で、家來を伴に連れて鷹狩に出かけた。ところが一天俄にかき曇つて大雨一時に到り主従はズブ濡れになつて、とある木蔭に雨宿りをした。すると濡れ鼠のやうになつた一人の若い百姓が「雨の降る日は天氣が悪るい……」と唄ひながら、そこを通り過ぎた。

それを靜かに眺めながら聽いてゐた政宗はハッとした。さうして家來達のズブ濡れになつた氣の毒な姿を顧みて、初めて「悟道」に入ることが出来たといふ話――

徳川時代には、將軍家が鷹狩を催す場合には、豫めその日の天氣豫報を徴したといふ。ところがさういふ時の天氣豫報は大抵「雨降り候天氣には御座無く候」といふのであつた。成る程これは名文だ。これならどつちにしても外れつがない。

即ちこの天氣豫報は二つの意味を持つてゐる。その一つは「雨が降ります、だから天氣ではありません」と解することが出来る。故にこの場合には「雨天」の警報となる。……併し同時に「雨の降るやうな天氣ではありません」とも讀める。故にさう解すれば「晴天」だといふことにもなる。

『晴天』と『雨天』……どつちにころんでも間違ひのない天気豫報！ 併しこれでは、どう考へて見ても天気豫報にはならない。

世の中には『雨の降る日は天気が悪い』といふことに氣の付いてゐない人が可なり多い。『雨の降る日は天気が悪い！』それはきまり切つた話だ。併しそのきまり切つた平凡事に氣の付かない人の多いのが今の世の中！ そこに世の所謂『認識不足』がある、さうしてそれあるが故に、人生には幾多の『無理』があり『社會不安』の絶ゆる日がないのだ。

故に私達は人生から『無理』を排除し、社會から『不安』を一掃し、『明朗の日本』を創建せんがため、先づ以て世人の凡てが政宗公と同じ『悟』に徹せんことを希望する。

更に私達は晴、雨両面に解釋の出来るやうな名文を書いて得意然たる人間の無責任極まる態度を絶対に排撃する。……ところが小柄口者の中を利かせる現代日本に於ては、さうした狡猾い無責任な振舞を取てする卑怯者が決して少くない。さうしてそこに私達は陰鬱限りなき日本の醜い姿を發見するではないか。

併し人間に一番大切なことは『右』か『左』か『イエス』か『ノー』かそれを飽くまで明瞭

にし、常に責任の所在を明確にして置くことだ。

斯くて九千萬國民が一人残らず、この大精神に徹底するとき、そこに初めて一點の曇りに無き『明朗日本』の完成を見るに至るであらう。

僕の『處女作』

元來僕は何も道樂のない男だ、併したゞ読み、さうして書くことが、道樂だといへば、さへないこともない、故に今日までに出版した著述も既に十指を屈する程である。無論その多くは、僕の専門に屬する論策であるが、中には趣味的傾向を多分に帯びたものがないでもない。

「本」を書いたことのある人は誰しも経験するところであるが、「本」の出来上つた時の喜びは、丁度子供の生れた時の悦びに匹敵する。併し何といつても、初めて子供の生れた時と同じ様に一番愉快なのは矢張り「處女作」の出来上つた時の氣持である。

僕の處女作『日本植民論』の誕生を見たのは明治三十九年の春であつた、さうしてその前後の思ひ出はいまだに忘れることの出来ないことの一つである。

僕は明治三十八年の七月に札幌農學校を卒業した、その卒業に間もない六月のなかば頃であつた。或日の夕方、僕はたゞ一人、ぶらりと寄宿舎を出た、無論食後の散歩で、南一條邊の本屋でもひやかして來ようといふのが、その目的であつた。丁度その時經濟學教室から出て來た佐藤先生（時の札幌農學校長、今の男爵佐藤昌介先生）が校庭に縁を垂れた、あの偉大なるエルの木蔭をしづ／＼と歩いて來られるのに出會つた。

佐藤先生は出會ひ頭に「東郷君！君は卒業論文を一體どうするつもりだ？」といはれた。これを聞いた瞬間に僕の胸はドキ／＼とした、「さては論文が教授會で否決されたのではないか」と思つたからである。併し僕はわざと平氣な風をしながら「卒業論文は、すつと前に提出して置いたのですが」と反問して見た。

「無論！君の論文は既に審査済みだ、併しあれだけの力作をあのまゝにして置くのは惜しいものだ、君！出版したらどうだね」と佐藤先生はいはれた。これはまた意外なことを聞くものかなと思つた、さうして「出版など夢にも思つてゐない」旨を明瞭に答へた。

「別に急ぐ必要もないから卒業迄によく考へて置き給へ！」といふ佐藤先生の言葉を最後に

二人は其のまゝ別れてしまった。

別れた後の僕は、佐藤先生の言葉を幾度も思ひ返しながら寄宿舎に歸つて来た。そしてこのことを友人達にも話して聞かした。友人は一人残らず出版を熱心に勧めた。併し、僕はどうしても、それを出版する気にはなれなかつた。何となれば、僕の卒業論文は「農業植民論」と題し、相当努力したつもりではあるが、僕にはその内容においてまだそれを出版するだけの自信がなかつたからである。

聽て卒業式も済んだ、僕はいやでも、應でも、社會人として働かねばならぬ、或日佐藤先生を訪問して、在學六年間の高恩を謝し、卒業の挨拶を述べた。ところが先生は「借金は出世の邪魔になるから借金をするな」と處世の途を教へ更に「どこへ行つて、どんな仕事をしてもらはないが、農學の立場だけは踏み外して呉れるな」と注意し（兎角札幌出身者には、脱線組が多いことを心配せられてのことだ）最後に「卒業論文出版の決心はついたか」とたづねられた。

僕は「出版するのはいやです」と答へ、その理由としては「あんな未熟なものを出版しては

出世の邪魔になるばかりでなく、金の欲しさの出版だと世間から思はるゝのがいやである」旨を説明した。ところが、佐藤先生は「あれを出版しても、君の出世の邪魔にはならぬ、また教授先輩の勤めによる出版であることを序文に明記して置けば第二の誤解は自然に消滅するわけだ、是非出版して植民思想の發達に貢献し給へ！」と熱心に説かれた、併し僕はどうしても、それを出版する気にはなれなかつた。

更に僕は演習室の指導教官であつた高岡熊雄先生（現北海道帝國大學總長）を訪ねた、先生もまた熱心に出版の然るべき所以を説き僕の決心を促された、然し僕はそれでも尙且つ出版の意を決するに至らず、そのまゝ札幌の學窓を巣立ちしてしまつた。

その後僕が新渡戸先生を小日向臺町に訪問したのは九月の初め頃であつた。丁度それは日露の講和條約に不満を感じた東京市民が警察官署の焼打ちを行つた日から二日目の朝であつた。僕は卒業論文の主張を實際に行はんがため、戦後の滿洲に職を求めんと欲し、これが幹旋方を先生に頼んだ。然し先生はそれに賛成しなかつた、そして却つて臺灣行を熱心に主張せられた。その際僕は佐藤、高岡兩先生から卒業論文の出版を勧められてゐるが、今尙その決心がつきか

ねてゐる事情を詳しく説明して、先生の意見をたゞいて見た。

新渡戸先生は「自分の書いたものに満足する日は恐らく死ぬまで来ないだらう、併し何かの問題を人より少しでも深く研究した場合には、その結果を廣く世人にも頒つのが、お互に學徒の果すべき義務の一つだ、兩君がそれ程熱心に勤めるなら、思ひ切つて出版したらどうだ、間違ひや、意に満たぬ點やらは、再版の時訂正すればよいではないか、本屋は僕が世話して上げる」といはれた。

僕は三先生の熱心な勧誘もだし難く、遂に出版を決心した。議論の専門に亘る部分を削除し、内容に多少の改訂を加へ「日本植民論」と改題したが、新渡戸先生の骨折で東京堂から出版することになった。

二十五歳の青年「東郷實」の書いたものが「本」にならう等とは夢にも思つてゐなかつた、従つてそれが「本」になつても「金」にならうなどとは尙更考へてもゐなかつた。

その頃懇意であつた先輩K氏の如きも「青二才の書いたものを本にして呉れることそれ自身が既に不思議な位だ、原稿料等貰へると思つてはならぬ」といつて居られた、ところが意外な

ことには、原稿と引換へに、東京堂は原稿料として僕に百五十圓を支拂つた。今と違つてその頃の百五十圓は相當なものであつた、殊に國元から毎月學資十五圓しか貰つてゐなかつた僕にとつては、その十倍にも當る金が一時に這入つたのだから頗る大金であつた。而も自力で金を稼ぎ出したのはこれが最初のことであつたから、僕にはそれが一種の感激でもあつた。

その翌年、即ち明治三十九年の二月には、新渡戸先生に連れられて僕は臺灣に渡り、先づ彰化廳に囑託として、社會生活の第一歩を踏み出すことになつた。僕の處女作が新装をこらして世に出たのはそれから間もない四月の初め頃であつた、センダンの花咲く庭を前にした小さな官舎にたゞ一人、この處女作を手にした瞬間の僕の喜び！それは三十年後の今日といへども忘れることの出来ない楽しい思ひ出の一つである。

僕の處女作は「天業を恢弘し天下に光宅せん」と仰せられた神武天皇建國の大精神に基き、内にありては、内國農村の保全に努め、外に向つては盛んに海外發展の大經綸を行ふべきことを主張したものであつた、そしてこれが具體的國策としては、滿韓に對する植民的經營の必要と世界三分の主張とを強調したものであつた。

新渡戸先生に連れられて臺灣に赴任した時のことである、途中まで迎ひに来て呉れた、川上
瀧彌さん（臺灣總督府技師）に向つて新渡戸先生が「東郷君の處女作が近い内に出来るが、君
のお嬢さん文學と違つて、東郷君のは天下國家を論じた男性的な大論文だよ」と冗談をいはれ
たことのあつたのをいまだによく記憶してゐる。

川上さんは夙に故人となられたが、札幌出身の植物學者であつた。而も科學者には珍しい程
の文章家であつた。川上さんの書かれた「花」といふ本は、僕等の學生時代に出版せられた
が、極めて文學的趣味に飽滿し切つた名著で、それが特に多くの女學生達に愛讀せられたとい
ふのであるから、新渡戸先生が「お嬢さん文學」だと、ひやかされたのも無理がない。

併し僕の處女作は、新渡戸先生もいはれた通り、さうした優しい文學的なものではなく、た
だ島國日本の將來を憂へ、海外發展の大理想を説いたに過ぎない、日本の海外發展の第一歩は
先づこれをアジア大陸に求むべきであることを力説したものであつた、而も國運の伸展に伴ひ
若き學徒の理想は、年と共にこれが實現を見ることになつた、即ちさきには日韓合邦の盛事あ
り今また滿洲帝國建設の大業を達成する等、一青年學徒が三十年前に主張した國策が、その後

着々として遂行せらるゝの現状に願ひて僕はたゞ一人會心の笑みを禁じ得ないものがある。

僕は今でも處女作の誕生に對する三先生の高恩を感謝せずにはゐられない、佐藤先生は本年
八十の高齡に達しながら、今なほ頑健壯者を凌ぐの慨を以て公私幾多の仕事に老後の努力を續
けて居られる。また高岡先生は、現に北海道帝國大學の總長として最高學府の經營に餘念がな
い、然るにたゞ一人新渡戸先生が一昨年秋カナダに客死せられて、今は世になきことの悲し
み、それにしても、懐かしきは、僕達の母校「札幌農學校」であり、「札幌の學園」である。

身に泌みた先輩の一言

僕は明治三十八年に札幌農學校を卒業したが、その頃からの主張「日本植民論」を實地に行ふために滿洲行きを熱望して居た。所が同窓の大先輩新渡戸稻造先生が臺灣行きを熱心にすすめらるゝので、翌三十九年の二月、同先生に連れられ臺灣に渡つてしまつた。

職は彰化廳囑託——殖産係長——月俸八十圓、學校出立での農學士にとつては過分の待遇で寧ろもつたない程であつた。併し植民政策を基調とした大經綸を行はうといふ理想に燃えてゐた血の氣の多い青年の僕には、これ等の總てが却つて苦痛の種であつた。

「技師が何だ、高等官が何だ、俺の進むべき途は他に在る」かう思ふと矢も盾も堪らなくなつて來たのであつた。

その年の八月、渡臺せられた新渡戸先生を臺北に訪ね、さうした自分の衷情を審さに訴へ、最後に

「先生！僕は一體何時まで彰化にゐなくてはならないでせう？」

とたづねた。すると先生は「自分のことを自分でかれこれいふんぢやない。總ては、世間の人に任せて置いて、君は死ぬまで彰化で働く決心でゐたまへ！」といはれた。

僕はこの「一言」がいたく身に泌みた。さうしてこの一言を心の中で幾度も繰り返し乍ら彰化に歸つて行つた。

間もなく先生は彰化に來られたが、或晩臺中で晚餐會があり、僕も先生のおともをした。そこに二人の女性が居た。

一人は〇〇子といふ十八ばかりの伶俐さうな藝妓。もう一人の女は△△といふ舞妓で、まだ十三位の小娘であつた。先生はこの二人を相手に色々話を居られた。そこで僕が、

「先生！僕は明朝一番列車で彰化に歸りますが、何か特に承つて置くことはないでせうか？」とたづねると、先生は

「何もないよ、併し不平は言つちやいけない。向上の意氣に燃えてゐる者は、何處に行つても不平はあるもので、人間の一生は不満の連続に過ぎないのだ。こゝに二人の女があるが、恐らくこの人達は臺灣には親兄弟もないのだらう。それなのに不平一つ言はずに黙つて自分達の務めを忠實に果してゐるではないか。この二人にくらぶれば君は幸福過ぎる位だよ」といはれた。

この「一言！」藝妓を前にこの手きびしい教訓はちとひど過ぎると思つた。併しよく考へて見ると實にその通りだ。自分に與へられた仕事そのものに全力を傾け盡して働くのが、ほんとの人生だ。「よし俺も男だ！ 不平なんかいふものか、死ぬまで彰化で働かう！」
翌四十年の六月僕は臺灣總督府技師に轉じ、殖産局農商課勤務となつた。地方廳から中央舞臺に乗り出し得たので、當座は可成悦しかつた。併しそれも束の間、やがて事毎に意に滿たないことが多かつた。

「向上の意氣に燃えてゐるものは、何處へ行つても不平は絶えないぞ」と教へられた新渡戸先生の教訓がひしひしと身に沁みだした。

「成る程さうだ！ この不平、この不満、これを克服して行く處に人生の向上發展があり、人間としての修養があるのだ」と考へながら、僕は相變らず、たゞ黙々として努力を續けた。ところが、二年後の明治四十二年には獨逸に留學を命ぜられ、伯林大學に學ぶこと二年、それから歐米各國の視察を終へて、四十五年の五月には再び臺灣に歸り、依然として殖産局に勤むることになつた。併し僕の外遊中に臺灣の官界には大異動が行はれ、出發前とは大分役所の空氣も變つてゐた。

歸朝直後、臺北で開かれた學士會の宴會で意外にも嘗て舞子であつた△△が、今は××と改名し、臺北一流の藝妓に成りすましてゐるのを見て、僕は臺中に於ける教訓の當夜を追憶して感慨無量であつた。それから間もなくその女は綺麗さつぱり斯界から姿を消してしまつた。：「矢つ張りあの女も心がけがよかつたのだな」と考へながら、僕は更に働き續けた。さうして

「一體俺は何時、臺灣の官界から足が洗へるだらう？」と思つて見たことも一度や二度ではなかつた。それからの臺灣生活十年間は、實に不平不満の連続であつたが、僕は常に「不平」

をかみ殺しながら、たゞ黙々として働き続けた。さうしてその結果收穫し得たものは「忍耐」と名づくる大きな果實であつた。

「不平の花よりも、忍耐の果實！」

僕はこの信念に基き、大正十三年の總選舉に當り「平靜なる官海に舟を乗り捨て、波瀾多き政界に駒を進むるの決心」をした。さうして幸にも當選することが出来たが、爾來正に十有一年、今尙ほ依然として陣笠生活を營んでゐる。而もこの陣笠生活に何等の不平なく奉公の出来るのは、一に新渡戸先生教訓の賜である。

「不平をいはずに死ぬまで働け！」

と教へられたその一言が一層身に沁みて堪らない。さうして僕はこの氣持をその儘現代——特に農村——の青年諸君に御傳へしたいと思ふ。……さうだ、凡ての行詰打開は、諸君の平なき努力に俟つより他に途がないではないか。

大正十三年の總選舉に當り、新渡戸先生は、東京驛發郷里に向ふことになつた。

『生命』の音

故床次先生の靈柩車は、明四日午前十時半東京驛發郷里に向ふことになつた。

無論私も他の同僚諸君と共に御伴をすべき筈のところ、家族の病氣その他に妨げられて歸り得ぬことの悲しみ！せめて横濱あたりまでお見送りし度いと思つてゐる。

床次先生俄の薨去！それは實に國家の一大損失であつた。……憂ふべき祖國の現状を打開すべく、明日の日本を双肩に荷なつて起つべき大政治家として、世の期待をかけられてゐた先生の急死は、確かに全國民に對して大きな衝動を與へた。

生前に於ける先生の進退に就ては、世間兎角見當違ひの批評が少くなかつた。然るに巨星一度び地に墜つるや、紛々たる俗論は忽ちにしてその影を没し、世は擧げて先生の偉大さを讚美

し、萬人均しくその長逝を惜むだ。……古人は「棺を蓋うて事始めて定まる」といつてゐるが、先生の場合が即ちそれである。

先生の薨去以來——甚だしきはその後、に於て——「先生を語れ！」といった様な注文が私のところにも各方面から殺到してゐる。併し先生の急變により受けた私の胸の痛みは容易に取去ることが出来ない。故に私はいまだに先生を語る氣にはなれない。否私の頭は筆を執るべく餘りにも混乱してゐる。

一週一回書くべき筈の「東京より」もそれ以來どうしても書くことが出来なかつた。無論それは書く暇がなかつたわけではなく、書く氣になれなかつた爲めである。

併し先生の英靈永遠に新照院大徳寺の墓地に鎮まり給ふ日の到來した今日、さう何時までも悲しみにかき暮れてばかりゐるわけにはゆかぬ。故に私は再び筆を執つて「東京より」を書き続けることにする。

嘗てカーライルは「大木の倒れる音は、向ふの山々にまで反響して、その音は實に凄まじい。併しそれは所詮「死」の音である。ところが小さな櫻の實が上から落ちて来る音は耳を聳て、

ゐてさへも聞えかねる程に小さい。併しそれは「生命」の音である。故に一度びそれが地に落つれば、いつか芽を出し葉を生じ、枝を延ばし、段々成長して次の時代の大樹に成る」といつた。

床次先生は巨木大樹に比すべき大人物であつた。故に先生の最期は恰も大木の倒れたるが如くその響は實に大きく、全日本を揺がす程のものであつた。併しその音はいかに大きくともそれは所詮「死」の音であり、悲しみの響たるに過ぎない。

然るに先生が過去の長き政治生活に於て、終始一貫世の毀譽褒貶を超越し、自己を宣傳せず、また何等辯明するところなく、たゞ黙々として所信に邁進しながら、絶えず君國の爲めに貴き或物を播きおろしてゆかれたその努力に氣の付いてゐる人は極めて少い。……併しそこに「人間床次」のほんたうの値打があるのだ。

小さな櫻の實の地上に落つる音は極めてさゝやかなものではあるが、併しそこには常に「生命」の音がある。それと同じ様に先生が地上に播きおろされたその實は音こそ小さいが、既に芽を出し、葉を生じ、枝を延ばしてゐる……たゞ残念なのは、その木が充分に成長して次の時

代の大樹たるに至らざるうちに、先生が早くもこの世を去られたことである。されば私達がこれから爲さねばならぬ仕事は、先生の遺志を飽くまでも繼承して、その木を培養しこれが成長を遺憾なからしめ、次の時代に於ける大樹を立派に完成することである。さうだ！『人格政治』と名づくる大樹の育成こそ、實に先生が未完成のまゝこの世に残してゆかれた大きな仕事の一つだ……故に私は今後といへども『人格政治』確立の目的達成の爲めに飽くまでも精進を續ける決心だ。

——一〇・一〇・三——

南洲庵の思出

昭和二年の秋であつた。ジネーヴ八年間の使命を全うして歸朝した新渡戸先生が病氣引籠中と聞き先生を病床に見舞つたことがある。先生は病床に横はりながら、我國の憂ふべき現状を痛歎し、これが打開の必要を力説せられた。さうして最後に「僕は現代政治家中、君のところのオヤヂさんが一番好きだ」といはれた。……オヤヂさんとは無論床次先生のことである。

更に先生は「併しどうも少し勇氣が足りない様に思はれるが、實際はどうかね」といはれた。……僕が「勇氣があり過ぎて困る」旨を説明すると「それなら國家のため、今少し自重して欲しいものだ」と熱心に説かれた。

そこで「勇氣があるかないか、親しく話し合つて見て下さい、私はその機會を作りますから」

といつてその日は別れた。

それから一ヶ月ばかり後のことである。僕は床次先生のお伴をして鹿兒島に歸つた。

何時見ても飽かぬ眺めの錦江灣！ その雄大な朝景色を右手に望みながら、今しも僕達の自動車は磯街道を東に向けて驅つてゐた。……無論車の中は先生と僕と二人切りである。

僕は「新渡戸先生が國家の爲め先生の自重を熱望してゐた」ことを語つた。ところが先生は「他日志を得た場合、文政のことを擔任して呉れる人を物色して見たが、今のところS博士が一番よからうと思つてゐる。然るに同君は近來健康勝れず、再び起ち得ないらしい、就ては新渡戸博士は至極適任だと思ふがどうだらうね」といはれた。

そこで僕も同感の意を表したところ、先生は「併しどうだらうね、年輩も相當だし、ほんたうに教育の根本的改革斷行の重任に自ら當るだけの勇氣があるだらうか」と訊かれた。

「勇氣があるだらうかね」……僕は兩先生の口から期せずして同じ言葉を聴くのをほんとに面白いと思つた。さうして「勇氣はありますよ、そのうちゆつくり話合つて見る機會を作つて下さい。新渡戸先生もきつと喜ぶでしょう」といつて後日を約した。

翌昭和三年の三月であつた。床次先生は午餐を共にすべく新渡戸先生を「南洲庵」に招待せられた。

南洲庵は今は故人となつたが、南洲翁崇拜の一女性の經營にかゝり、芝公園内に在り、閑靜にして清談には持つて來いの場所である。丁度その日新渡戸先生は同じ公園内に在る正則中學校の卒業式に講演をせられたが、その講演の終るのを待つて、僕は先生を南洲庵に案内した。

斯くて對手方の「勇氣」に就て多少の懸念を持つてゐた兩先生は、心靜かに小半日をそこに語り暮した。……勿論舊知の間柄であるから、何等遠慮の必要もない。故に内治外交各方面に亘つて意見の交換が充分に行はれた。併しそれよりもこの會談によつて兩者互に相手方の「勇氣」に就て遺憾なき理解の出來たことは、一つの大きな收穫であつた。さうして僕は兩先生の將來に大きな期待を持つてゐた。

爾來歲月は夢の如く流れて正に八年！ 而して未だその時到来らざるに、夙くも新渡戸先生は一昨年の本月本日——即ち十月十六日——キヤナダに客死せられ、床次先生またその大經綸を行ふの日なくして遂に逝かれた。……即ち兩先生が國家の爲め、ほんたうの「勇氣」を發揮す

るの機会を得ずして空しく逝かれたことは、どう考へて見ても残念でたまらぬ。

それにしても常に一身を君國の爲めに投げ出してゐた兩先生の南洲庵に於けるその日の會談！ 今となつてはそれが深き思出の種である。

さらぬだに秋は淋しい！ 殊に兩先生亡き今年の秋は、僕をして一層の淋しさを感じしむる。

— 一〇・一〇・一六 —

世界を支配するもの

試みに世界地圖を繰展げて見よ！ 然らば太平洋の西に盡きるところ、そこに一つの小さな島國を發見するであらう。即ちそれが我等の祖國「日本」である。

いはば大海の一粟粒！ 地理的にも領土的にも取るに足らない程の小さな國だ。併し山は高きが故に尊からず、樹あるを以て尊しとなす。また國は廣きが故に尊からず、そこに熱烈火の如き祖國愛に燃え切つた國民を有するにおいて始めて尊いのだ。……さうして、我等はこの意味において、我等の祖國「日本」の偉大なる眞の姿を發見することが出来るではないか。

世界地圖の上に眞赤に染め出された「日本」の國は如何にも小さい。併しすべて物の中心は一つの「點」に過ぎない。而して「點」は小さい。但しその小さな「點」のみが物の中心には

なり得るのだ。

即ち世界地圖の上に小さく而も眞赤に染め出された「日本」こそは、眞に三千世界の中心たるべき運命を有するものではないか。……さうだ、我等の祖國「日本」こそは、明日の世界に於てその「心臓」となるべき大使命を有するものだ。

古代文化の花は地中海の岸に咲いた。さうして地中海文化の中心はギリシャであつた。然るにギリシャの國家そのものは如何にも小さなものであつた。

近代に至り世界文化は大西洋に移つた。而も大西洋文化のリーダーはイギリスであるが、そのイギリスが、また馬鹿に小さいのだから面白いではないか。

古今を通じて、世界文化の心臓部を成した國は何れも小さい。併しその小さな心臓部の働きは常に大きい。さうしてその大きな働きこそは、實に世界的文化發展の根幹を成すものである。人體に於ても心臓部の占むる容積は極めて小さい。併し人間の全生命は常にその小さな心臓部の働きに支配されてゐるのだ。

ギリシャの衰頹は地中海文化の破滅を生み、イギリスの老衰は大西洋文化の行詰りを招來し

た。……即ち今や西洋文化の没落近きに在りと説くものは、敢てスベングラ―一人のみではない。而も物質的な西洋文化の行詰は精神的な東洋文化の援助を俟つにあらずんば、これが打開の途はない。故に世界文化の中心は今や三轉して、太平洋に移らんとしてゐる。

即ち今や世界文化の中心は太平洋に移動し、そこに東西兩洋の文化を融合統一した新文化を創造せんとしてゐるのが、我等の祖國「日本」である。故に日本は明日の世界に於て極めて尊い心臓部の働きを爲すべき一大使命を托されてゐるのだ。

今や「物質文化」の毒血によつて衰弱の度を加へつゝある世界のあらゆる民族をこの病苦から救済するのが、我等の祖國「日本」の天職なりとするならば、我等九千萬國民は一条亂れずこれが使命の達成に邁進しなくてはならぬ。

保健の第一要件は強健なる心臓の保有である。故に明日の世界に於て心臓部たるべき「日本」の責務は實に重大なものである。

世界の心臓たる「日本」が力強く而も淀みなく送り出す清淨の血液は、これを名づけて「精神文化」といふ。……而もこの新鮮なる血液が全世界の隅々までくまなく行き渡るとき、そこ

に始めて我等は建國以來全人類の幸福と全世界の平和とを理想とした『天業恢弘』の大業を達成することが出来るであらう。

重ねていふ。……世界地圖の上に染め出された我等の祖國『日本』の姿は、どう考へて見ても小さい。併し明日の世界に於て、その心臓部たる運命を有する『日本』が形に於て小さいのは當然のことであり、そこに『日本』の世界的存在の眞意義がある。

小さな姿に大きな仕事！ 明日の世界を支配するものは我等の祖國『日本』だ。……然り、小さな心臓が人間の全生命を支配すると同じ様に！

—一〇・一一・一四—

志 在 君 國

床次先生俄の薨去！ それは實に國家の一大損失であつた。……憂ふべき祖國の現状を打開すべく明日の日本を背負つて起つべき大政治家として世の期待をかけられてゐただけに、先生の急死は確かに全國民に對して大きな衝動を與へた。

生前に於ける先生の政治的進退に就ては、世間兎角見當違ひの批評が少くなかつた。併し先生の志は常に君國に在つた。故に先生は終始一貫世の毀譽褒貶を超越し、自己を宣傳せず、また何等辯明するところなくたゞ黙々として所信に邁進した。

然るに俗眼にはそれが無節操に見え夢遊病者と映じ、政權慾の現れとも思はれた。……ところが巨星一度地に隕つるや紛々たる俗論は忽ちにしてその影を没し、世を擧げて先生の偉大さ

を讚美し、萬人均しくその長逝を惜むだ。……古人は「棺を蓋うて事始めて定まる」といつてゐるが、先生の場合が即ちそれである。

昭和三年八月一日の午前六時半であつた。床次先生から「急用が出来たから、直ぐ来て呉れ、寢衣のまゝでよい」といふ電話がかゝつて来た。僕は直に駆付て見ると、先生は既に羽織袴に身を固め食堂のテーブルに倚つて靜かに手紙を書いて居られた。而もそれは急用等忘れたのではないかと思はれる程落付いた態度であつた。聽てそれを書き終つた先生は徐ろに口を開かれた。「先年外遊の際物した「歐米小感」を乃木將軍が讀まれ、朱筆で批評やらけん點やらが加へられてある本を持つてゐる人から、珍らしいものだが讀むなら貸してやらうといつて来た。よつて是非貸して貰ひ度いと、今返事を書いたところだ」といはれた。

そこで僕が「それと同じ様なことが新渡戸先生の書かれた本にもありますが、乃木大將は何時にも眞剣に本を讀む方であつたと見えますね」といふと「さうかそれは面白い話だ」といはれた。

こんな話を一とくさりしてから、初めて先生は「時に君に来て貰つたのは外でもない。實は

昨晚の九時に民政黨脱黨新黨樹立を決心し、本日午前十時に東京會館で發表することにした。そこで昨夜それ／＼新聞方面に招待の電報を出した次第だ。」といはれた。僕はこれを聽いて大變な事になつたものだと思つた。

先生は更に「而もこの事は全く僕の獨斷専行によるものだ。黨内の同志と豫め相談すれば陰謀となり、且つ事の成らざるを惧れたので、全く誰にも相談しなかつた。……國の諸君にも何等相談しなかつたが、それはこの大精神に出でたので決して他意はない。併し國の諸君は何を差し措いても僕の企てに賛成して貰はねばならぬ」といはれた。

更に先生は新黨樹立の目的を説明して「今日の行詰つた對支問題を速かに解決することが東洋の平和を確立し、我國の經濟的發展を遺憾なからしむる所以だ。然るに田中内閣は船を暗礁に乗り上げてしまつてゐる。故に田中總理一人の手ではこの難破船は到底救済は出来ない。それかといつて民政黨の幣原外交は既に昨年南京事件で試験済みだ。故に支那問題を眞に解決し得るものは前科なき者の手を以てするより外に途はない。而して熟慮の結果自分自らその事に當るの決意をした。而もそれを斷行するには民政黨を去つて新しく自由の天地に一黨を樹立

するより外に途がない。これが今回の企圖を敢てする所以だ」といはれた。

僕はこれを聴いて、その志は實に偉いと思つた。併しこれを打算的に考へるならば、まことに損な行き方であつて、これでまた先生の政權に近づくのが遅くなつてしまつたと思つた。

先生は更にいはれた。

「ねー君！ さうすることが、眞に政治家として國家に御奉公する所以ではないか。……今のまゝ、民政黨にちつとして居れば、この次には民政黨内閣が出来て、君達にも何かよい事があるだらう。併し僕と一しよに行けば廻り道をして損することになる。但しそれが國家の爲めなんだから僕と一しよに難儀をして呉れるだらう」……さういふ先生の顔には非常な決心の色が見え、國家の爲めには一身を犠牲に供するもまた止むを得ないといった様な面持であつた。……この瞬間に於て僕は國家の爲め先生と難儀を共にする肚を決めてしまつた。併し新黨の前途は極めて難航であると考へた。何となれば一般人は先生が考へてゐるよりはもう少し打算的であるからだ。

世間では先生の民政黨脱黨を以て政權慾に出發したものであるかの如く批評したのも少く

なかつた。併しそれは先生の眞意をうがつたものではない。「僕と一しよに行けば、廻り道をして損することになる」といふ先生の一言は政權慾にかられた者の口より聴き得る言葉ではない。「さうすることが國家の爲めなんだから、僕と一しよに難儀をして呉れ」と要求したところに先生の眞意はあるのだ。「何事も國家の爲めだ、一しよに難儀をしよう」といふその氣持こそ眞に床次その人の終始一貫變るところのない政治的行動であつた。……その爲に先生は常に損ばかりしたので。さうして先生はその損を取り返す日もなくして遂に逝かれてしまつたのだ。併し先生は別に自分では損したとは考へてゐなかつたかも知れない。何となれば先生はこれから先きまだ十何年も長く生きてゐて眞に國家に御奉公せんとする意氣に燃えて居られたからである。

先日齋藤子爵にお目にかゝつた際、子爵も「自分は床次君がどんな國策を持つてゐたか、ゆつくり話し合つて見なかつたからよくは知らぬ。併し床次君が常に國家を念として、遠き將來を慮かつて政治的行動をせられた一點は敬服の外はない。殊にさうした政治家の少い今日床次君の亡くなられたのは残念なことだ、生きてゐて呉れさへすればよかつたが」と惜しんで居ら

れた。……『もう少し生きてゐて貰ひたかつた』といふのが萬人共通の氣持だと考へる。

床次先生は決して自己を辯明しない人であつた。故に先生亡き今日僕は敢て先生に對する世間の批評を彼是れ辯明しようとは思はぬ。併し事の真相を明瞭にして置く爲めに、この一事を述べ以て『志在君國』といつた先生のほんたうの精神を明かにして置き度いと思ふ。

床次先生は一體どこが、偉いのだと考へて見ても、分析的には取り上げて説明の出来る様な點が極めて少い。……たゞ何となく偉さを感じしめ、たゞ何となく抱容力の大きなを思はしむるだけだ。

併し説明しなければ偉さがわからない様な人ではまだ本當の偉い人ではないのだ……たゞ無意識の間に何となく偉いと感じしむるこそ本當に偉い人なんだ。即ちこの點が如何にもよく南洲翁に似通つてゐる。

僕は床次さんが偉さに於て南洲翁と同一であつたとはいはぬ。併し同じ型の巨人であつたことは、事實がよくこれを證明してゐるではないか。

—一〇・一一・一五—

「四本」と「資本」

本年十月一日施行の國勢調査の結果に就ての速報によれば、我國內地の總人口は六千九百二十五萬人餘であり、それに朝鮮、臺灣、樺太を加へた全版圖の人口は九千七百六十九萬餘人を算する。更にそれに關東州、滿鐵附屬地及び南洋諸島をも算すれば、實に九千九百四十五萬餘人の多きに達してゐる。

即ち我國の總人口は過去五箇年間に約七百六十六萬人、一年平均百五十萬人を増加してゐる。故にそれが一億を突破するのは、今後半歳を出でないであらう。

現在一億以上の人口を有する獨立國は支那、イギリス、ロシア、アメリカ、フランス等の數國に過ぎない。而もその本國だけの人口に就ていへば、英佛兩國は遠く我國に及ばない。故に

我國は今や人口の上に於ては、世界屈指の巨大國となつた。

『三千餘萬兄弟どもよ!』と唱つたのは僕達の小學校時代であつた。而も僅々半世紀にして約三倍の増加!

この大増加は我國の領土的發展がその一因を成してゐる。併しそれにしても日本民族の自然増加そのものが極めて旺盛であることがその主因であることを忘れてはならぬ。而もこの事實が民族としてもまた國家としても、今尙ほ極めて『若き存在』であることの證左であるから悦しいではないか。

我國は國土も狭く資源にも乏しいおまけに資本も潤澤でない、故に單り人口のみが増加するのは宜しくないから『産兒制限』が必要だと主張する向もある。併し僕はこの主張には賛成が出来ない。

成る程マルサスが主張した如く『人口問題は食糧問題』であり、またマルクスのいつた様に『人口問題は職業問題』でもある。故に一億の人口を有する以上、これら凡ての國民に遺憾なく食糧と職業とを與へるのが、我國の政治でなければならぬ。即ち國策の凡てはそこに出發す

るのが當然である。然るにこの積極的方途に出でずして、たゞ徒らに人口の増加に人為的制限を加へんとするが如きは、恰も成長力の旺盛な樹木の芯を摘むの暴舉に等しい。

國土の狹隘と資源の貧弱とは旺盛なる人口の増加によつて償ふことが出来る。更にそこに資本の缺乏ありとするならば、我等日本人はそれに代るべき他の或ものを保有してゐる。即ち我等には親譲りの手が二本、足が二本合せて『四本』がある。この『四本』こそは實に『資本』に代るべき大きな資産だ。……而もこの『四本』の蓄積には人口増加の旺盛なることを前提とする以上、我等は飽くまでも、我國の人口増加の急速なることを喜ぶものである。

而してこゝにいふ『四本』は『勞力』を意味する。故に我國の人口問題の解決の根本策はこの『四本』を世界到る處に遺憾なく發揮するの自由を得ることである。

今日土地及資源の國際的分配その宜しきを得ざることが戰爭の原因でもあり、また全人類の福祉を平等ならしめざる所以でもある。即ちそこに世界不安の病源ありとするならば、我等は先づこの不公平なる現状の打破に努めなくてはならぬ。

今試みに『土地對人口』の割合が如何に不公平であるかを説明して見るならば、我等日本人

が豊一枚に一人の割合に生活してゐると假定すれば、アメリカ人は十一枚に一人更にカナダ及濠洲は百五十七枚に一人の割合にて生活してゐることになる。而も斯の如きは實に必要以上に不公平な土地の分配だ。

然るにアメリカは大正十三年七月一日より我等日本人の移住を嚴禁し、カナダもまた有色人種の來住を欲しない。更に濠洲に至つては夙に「白濠洲」を高調し、鎖國の看板を高く掲げ固く門戸を鎖して有色人種の移住を許さないではないか。斯くても尙ほ口に人道を唱へ、博愛を叫んで見たところがそれは一種の口頭禪に過ぎない。

こゝに於てか僕は絶叫する。即ち「土地徒らに廣くして人口これに伴はず、これが開發に必要な勞力を充分に有せざる國家民族あらば、そのあり餘つた國土を全人類の福祉増進の爲めに提供せよ……更に國土徒らに狭くして人口多くその勞力を用ふるの餘地なき國家民族あらばそのあり餘つた勞力を同じく全人類の福祉増進の爲めに提供せよ」、……斯くて「土地と勞力」この二つが確り結びついてそこに初めて全人類の福祉が平等に増進せられ、世界の眞の平和が確立せらるゝであらう。

而もこの大理想を全世界に向つて堂々と呼びかけ得るものは世界廣しといへども我が日本以外には斷じてない。即ち僕が多年この主張を高調する所以のものは、我等日本民族の果すべき獨特の世界的大使命を痛感するからである。

最近アメリカのハウス大佐が不公平なる植民地の分配是正を主張するや、それが特に我國民の興味をひいた様に察せられる。外國人の言説には兎角無條件に耳を傾ける傾向のある日本人としては無理のないことかも知れない。併し日本はもう少し日本自身の言説や主張に注意を拂ふことがより以上に必要ではないか、さうしてさうすることが、眞に日本人自身の世界的使命を達成する所以でもある。

我國の人口が正に一億に達せんとするの秋に當り、僕は更めて僕多年の主張をこゝに表明し、同時に依然として「産めよ、殖えよ、廣がれよ」といふユダヤの主張に賛意を表する。

人生の冬

あの若くて死んだイギリスの詩人バイロンは「人間よ、お前は笑と涙との間の振子だ！」といつてゐるが、これは如何にも「人間」をよく説明してゐると思ふ。よく笑ひ、よく泣くのか人間の通有性だ。世の中には「泣き笑ひ」といふのがあるかと思ふと「悦し泣き」といふのもある。

故に人間は右手に「笑の袋」をぶらさげながら、左手には「涙の壺」を抱いて歩く動物に過ぎない。即ちバイロンのいつた如くに「笑」と「涙」との中間を時計の振子の如く働きつづけてゐるのが「人間」だ。

その人間が生れてから死ぬまで、休みなく營んでゆく生活が即ち「人生」だ。故に人生は樂

な如うで、決して樂ではない。

ヴ・クトル・ユイゴは「人生は航海だ」と稱し、セネカは「人生は戦争だ」といつてゐる。またジェ・エム・パリーが「人生は悪魔との相撲である」といふかと思へば、ハンナ・モリアは「人生は短い一日だ、但しその一日も安息日ではない」と説いてゐる。

これ等は凡て「人生」の容易でないことを説いたものであるが、併し最もよく人生を説明してゐるのはジ・セフ・ロウではなからうか。

即ち「人生は春に花を、冬に氷塊を浮かせる小川の如うなものだ！」といつてゐるのがロウである。春は暖かい、従つて春の小川は流るゝ水に温みがある。殊にはら／＼と散り来る岸邊の花を浮かべながら静かに流るゝ春の小川には、確かに「喜悅」と「快樂」と「幸福」とが宿つてゐる。……さうして「人生の春」の姿が即ちそれである。

併し冬は寒い、同じ源から流れ出た小川でありながら冬の水は冷たい。而も大きな氷塊さへも浮べて流るゝ冬の小川は如何にも「悲哀」と「寂寞」と「不幸」とを表現してゐる。……さうしてそれがまた「人生の冬」を物語る姿でもある。

人の一生には春の喜びもあれば、また冬の悲しみもある。併し一年を通じて四季がある如く春のみの人生もなければ、また冬のみの人生もない。……春去ればやがては冬が来り、更に冬の次には春が訪れる。さうしてそれがほんたうの人生だ！
故に人生には春に淫せず、また冬に屈しないだけの修養が常に必要だ。而も人生の修養は春よりも冬に於て爲さるゝことが多い。

アムステルダムの美術館にオランダの畫家ジ・セフ・イスラエルス（一八二四—一九一一年）のゑがいた『人生の冬』と題する名畫がある。僕は嘗てこの繪の前に立つて大きな感激を覺えたことがあつた。

煤煙にくすぶつた小さな部屋！そこには粗末な椅子に腰をかけながら暖爐に両手をかざす一人の老媪がゐる。

彼女の纏つたボロの如うな着物、骨張つた節だらけの手、さうして僅かばかりの焚火！
僕の眼に映じたものは、たゞそれだけであつた。

淳朴とか質素とかいふ言葉は、とてもこの老媪の生活そのものを形容するには足りない、即

ちそこには『貧困』と『孤獨』といふ感じの他には何物も發見することは出来なかつた。

過去六、七十年の長きに亘り、たゞ一心不亂に働き續けて來た『人生の冬』が即ちこれであることに氣がついたとき、僕はたゞ何となくこみ上げて來る自分の涙を如何ともすることが出来なかつた。

然るに一度その老媪自身の心境に氣がついたとき、僕は思はず襟を正した。

彼の女の顔には年を重ねた苦勞の波が深く刻み込まれてゐる。併しそこには何等不平不満の色が見えない。たゞ有難きこの世を感謝しながら、安らげく『人生の冬』を營み續けてゐる彼の女の尊敬すべき心境が窺はれるのみであつた。

『人生の冬』は淋しい。併しその淋しい『人生の冬』を楽しく暮し得る人は幸福だ。さうして寒い『人生の冬』を温く過さんとするならば絶えず心の修養に努めなくてはならぬ。

然り、人生には死の最期まで修養が必要だ！

莊 嚴

邦語の「莊嚴」と英語の「サヴライム」とが果して同意義の言葉であるかどうか、僕にはよく分らない。併し大體に於ては、同じ意味に解してよからう。

それにしても、僕は今までの内で「莊嚴」とか「サヴライム」とかいふ氣持を強く感じたことが、前後を通じて三廻程ある。

僕は明治四十年の五月に東京で結婚した。さうして臺灣へ歸任の途上、先づ第一に妻と共に伊勢の大神宮に参拜した。

従來といへども、僕はよく「莊嚴」といふ言葉を使つて來た。併し僕がほんたうに心の底から「莊嚴」の氣に打たれたのは、その時が始めてであつた。

その後明治四十三年の夏當時ドイツ留學中の僕は學友石田研君と共に山紫水明の國スイスに旅してアルプスの高峰ユングフラウに登つた。さうして萬古消ゆる事なき白雪の裡に、あの大自然を發見したとき僕は英語の「サヴライム」といふ氣持がこれだなど感じた。

更に明治四十四年の暮れ近く、僕はアメリカに渡り、當時滯米中の新渡戸先生と正月をフラデルフ・ヤに迎へた。さうして先生と協議の結果、アメリカ内部の旅行を見合せ、西印度諸島を巡りて、植民地の實狀を視察することにした。

併し其際新渡戸先生は「テキサスの農業や、シカゴの屠獸場はどうでもよいが、ナイヤガラだけは是非見て置け」といはれた。斯くて僕が南下に先立ち、ナイヤガラ見物のため北上したのは、明治四十五年一月の初旬であつた。

時は冬の眞最中！ 白雪に色取られた大自然！ それに大きな氷塊を抱きながら、雷の如き音して流れ落ちる水の姿！ 僕はこの雄大な瀑布の前に立つたとき、覺えず「オー・サヴライム！」と叫んだ。

僕は「ほんとに見に來てよかつた」と思つた。さうしてそれと同時に新渡戸先生が「ナイヤ

ガラだけは見て置け」といはれたことの眞意を初めて會得することが出来た。
ユングフラウの雄姿と、ナイヤガラの壯觀！ 前者は「靜」であり後者は「動」である。故に同じ「サヴライム」を感じたとしても、その姿は必ずしも同一ではない。「併しそこには人間の力以上の或大きな力が存在するのだといふ感じを與へて呉れた點に於ては、兩者共に區別がなかつた。

その大きな力を或は「神」と稱し、或は「佛」と名づけるのかも知れない。さうして、たゞ何となくその前に立つたとき思はず襟を正すといふのが「人間」そのものゝ立派な天性ではないだらうか。

併し、同じく「莊嚴」といひ「サヴライム」といつても我等が伊勢の大神宮に参拜したときの氣持はまた格別である。さうしてこの氣持は、我々日本國民でなければ、到底感ずることの出来ない一種の尊さであり、莊嚴さである。

「何事の在しますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」……これは伊勢の大神宮に参拜した總ての日本國民が一様に感ずるところの有難き氣持である。さうしてそこに我等は「日本

精神」のほんたうの姿を發見することが出来るではないか。

「日本精神」はこれを學問的に、また科學的に説明すれば、説明の方法はいくらでもある。

併しそれよりも我等日本國民が伊勢大廟に参拜したとき、何等説明を要せずして直感するところの神秘的な「莊嚴」こそは、ほんたうの「日本精神」をそのまま表現したものではないか。

故に「神國日本」の眞の姿は「莊嚴」の二字に盡きてゐる。

「莊嚴」それは「神國日本」の眞の姿である。

一振の短刀

僕の郷里「財部」は大隅の一農村だ。さうして今度の特別大演習の中心地たる都城平野の一部を成してゐるが、その昔庄内戦争に際し、華かな戦物語——形見の櫻——を後世に残したので有名な古戦場でもある。

併し僕の家は村の中心たる「藪」から東に八町ばかり隔つた正ヶ峯といふ方限——部落——に在る今でこそ都城市に通ずる立派な縣道筋になつてゐるが僕達の小學校時代には道も狭くて藪までの夜道などは物騒なものゝ一つであつた。

僕の家から少しばかり行くと「霧島口」といふところがある。そこは墓地の入口になつてゐるので「墓原口」ともいつた。夜になるとその樹の枝からは「白木綿」がぶら下るといふ噂

さ！

更にそこから一町餘り行くと「新田橋」がある。この橋の下には「河瀬」がゐて、何時も人をばかすといはれてゐた。

その橋から町の入口まで三、四町ばかりの間は、田圃続きになつてゐる。而も新田橋から少し行つた右側の田圃の中には、「伯耆殿の藪」といつて一寸した木立ちの藪がある。さうしてこの藪の中には、庄内戦争の際庄内方の手に捕はれて處刑になつたといふ「渡邊伯耆」の墓がある。ところが今でも夜更けになると、この藪から神主姿をした伯耆の亡霊が「首切れ馬」に乗つてよく出て來るといふのだから、子供心にはそれも恐ろしいものゝ一つであつた。

その次には「前川橋」がある。先日歸つて見ると秋の大演習にも關係があるといふので立派な鐵筋コンクリートの橋に架け換へ工事中であつた。併し僕達の小さい時分の前川橋は巾の狭い一枚板の橋に過ぎなかつた。而もこの川には「河童」がゐて人の尻をねらつてゐるといふのだからたまらない。

この橋を渡ると、今度は町の入口に近いお寺續きに「茶毘屋敷」といふ墓地がある。こゝは

渡邊伯耆が火刑になつた場所だといふ。この墓地から漏れ来る燈明の光も、決して氣持のよいものではなかつた。

そこを過ぎて町にはいれば、もうしめたもので、あとは何等の不安もなく麓まで行ける。僕達の子供時代には、小學校の他に青少年の教育機關として必ず「學舎」の設けがあつた。無論それは夜學であるがそこで身心の練磨に勵げむのが薩摩本來の教育であつた。即ち僕が麓の夜學——共進學舎——に通ふことになつたのは、丁度十一、二歳の頃であつた。併しその頃の僕の部落からは一人も學舎に通ふものがゐなかつた。だから僕は堅でも應でもたつた一人で通はねばならなかつた。

あのさびしい田圃道！ 而もあの恐ろしい話の多い難所のある夜道を一人で通ふのかと思ふと、僕の幼な心は可なりの動搖を感じた。……「僕も男だ！ 人の通る道なら僕にも通れないことはない筈だ！」と覺悟は決めて見たものゝ、そこには、尙ほも多く不安が残されてゐた。丁度今夜から夜學に行くといふ日の夕方であつた。父は蔵から取り出して來た一振の「短刀」を僕の前に置いた。さうして「この短刀をお前に遺る！ 世の中に恐ろしいものは人間より外

に何も無い。併し若しも恐ろしいと思ふものに會つたら、遠慮なくこの短刀で突け！」といひながら、父はその短刀を手づから僕の腰にさして呉れた。

斯くて僕はたゞ一人共進學舎へと夜道を急いだ。併しそこには「白木綿」もなければ「河獺」もゐず「首切れ馬」にも出會はねば「河童」の影も見えなかつた。また「茶毘屋敷」から漏れ来る新墓のお燈明も、その晩に限つて暗夜を照らす燈明臺の様な氣がした。……但しそれでも町の入口まで來ると、ほつとして胸を撫でおろした。

歸り路も同様であつた。即ち第一日は先づ恐ろしいと思ふ程のこともなく無事に終つた。二日目の晩も、僕は短刀を腰にさしたまゝ夜學に通つた。併しこの日も何等の故障なく歸ることが出來た。さうして「世の中には何も恐ろしいものはゐないのだ」といふ信念が、二晩の體驗で幼な心にもすつかり出來上つてしまつた。

三日目の晩に、僕は思ひ切つてその短刀を父に返してしまつた。さうして、「世の中には、何も恐ろしいものは居りませぬ。だからこの短刀は僕には不用の品です。こんなものを持つてゐると、自分で怪我する位が關の山です」といつた。

父は非常に喜んだ。さうして僕のこの決心を讃めながら「それではこの短刀はお前が東京に上る時まで父が預つて置く」といつた。斯くてその短刀は再び蔵の中に納められてしまった。僕が郷里の小學校を卒業すると同時に、東京に上つたのは明治二十七年の五月で、實に十四歳の春であつた。さうして餘り多くもない荷物の中にその短刀が一つ加へられてゐたことはいふまでもない。

爾來四十年の久しきに亘り、或は東京に、札幌に、更に臺灣に、伯林に、また南洋に！僕は片時もこの短刀を側から離したことがない。……それは常に父と共に在るの氣持を持續する爲に！

一振の短刀！それは僕の幼な心に大きな信念を與へて呉れた思ひ出の短刀！
今でも鞘を拂へば、そこには常に亡き父の尊い魂が宿つてゐる様な氣がする。

——一〇・一一・一一——

光は日本の家庭より！

ペスタロッチーは「家庭」が教育の淵源であり、家庭を中心とした教育が、ほんたうの教育だと説いてゐる。さうして彼の書いた「隠者の夕暮」の中には「神の親心、人の子心」とあり更に「君の親心、民の子心」とある。

神は親の心を以て凡ての人間を護り給ひ、人間はまた子の親に奉へるの心を以て神を敬ふ。そこに眞の人生はあるのだ。併しそれよりも「君の親心、民の子心」こそ教育の上には大きな力を投げかけるのではないか。……「君は親の心を以て民を愛し給ひ、民は子の親に奉へるの心を以て忠を盡す」そこに眞に平和な國家があり、眞に幸福な國民生活があるのだ。而して我等は特に我國に於てその然るべき所以のものを發見する。

我國の國體は皇室と臣民と「和」を以て終始一貫してゐるところにその眞髓がある。上には常に衆民を愛撫するを以て天職と爲し給ふ聖天子をいたゞき、下には皇室に奉仕すること以外には何も存しないところの誠忠無二の國民がある。即ち「一君萬民」の國體に我國の眞善美を發見するではないか。

日本の國家は皇室を宗家とした大家族によつて組織せられてゐることは、國史の明示するところである。故に歴代の聖天子何れも國民を遇するに赤子を以てせられ、そこに「君の親心」を遺憾なく發揮せられた。

明治天皇の御製

罪あらばわれをとがめよ天津神

民は我が身の生みし子なれば

を拜し、誰かその尊い親心に感泣しないものがあらうぞ、畏いことながら、これ程「君の親心」に徹した天子様が外の國のどこにあるだらうか。これ程民を愛撫するの心に充滿し切つた主權者が、またとどこかにあるだらうか。……尊きは我が國體！ 有り難きは君の親心！ さうし

てそこに我等は皇室を家長とした世界無比の大家族の國家の誇を感ずるではないか。

「學校教育」のみが教育であるかの如く考へるのは大きな間違だ。故に我國教育の革新は家庭教育から出發しなくてはならぬ。而して家庭を中心とした教育が眞の教育なりとするならば、國家を擧げて一つの大きな家庭に過ぎないところの我が大日本帝國こそ、眞の家庭教育に終始するものではないか。

即ち我國の教育は、學校教育も、社會教育も、更に家庭教育も凡て大日本帝國と名づくる大家庭の中に融け込み更に大きな家庭教育を形作つて行くところに、日本の教育的特殊性を發見するのだ。さうしてそこには聖天子が「君の親心」を以て國民を教へ導き給ひ、生徒たるべき九千萬國民は「民の子心」を以て師の教を受け、以て「君民一體」の精華を益々發揮するのだ。即ちそこに「和」を中心とし「愛」に出發した眞の教育が確立せられるとき、始めて建國の大精神に則した「文化」の創造も出來、正しく強き日本の姿をも發見することが出来るであらう、さうだ「光は日本の家庭より！」

『義理』と『人情』

あの若くて死んだイギリスの熱情的詩人バイロンは嘗て「人間よ、お前は笑と涙との間の振子だ！」といつた。さうしてそれは如何にもよく人間そのものを説明してゐると考へる。

併しそれよりも、私は「人間よ、お前は義理と人情との間の振子だ！」といひ度い。即ち人間から「義理」と「人情」とを取り去つたならば、一體あとに何が残るだらうか。

近頃不愉快に感じたことの一つは、帝都の眞中で或青年が肉親の者から謀殺されたといふ事件である。私はあの新聞記事を読みながら、一時は自分の眼を疑つた位ひであつた。併し事實は事實として如何ともすることが出来なかつた。

假令それが不良兒であつたにしても、現在自分達の生んだ子ではないか。然るにその子に豫

め巨額の保険金を掛けて置いて除るに殺すといふ如うな胴慾非道の親達がまたこの世にあるものだらうか。「義理」も「人情」もない暗黒の人生！ 而もそれが現實の社會に存在するのだ、といふことに氣のついたとき、私は涙なしにはゐられなかつた。

元來「義理」や「人情」に厚いのが我等日本民族の特性ではないか。あの芝居でよくやる「寺子屋」の松王丸が、主君菅秀才の身代りとして我が子を源藏に殺さしたのも、また「先代萩」の政岡が我が子の千松を主君鶴千代君の身代りに立てたのも、凡ては「義理」の爲めに「人情」を棄てるといふ日本人特有の民族精神が立派に發揮せられた結果である。

併したゞそれだけのことであつたならば、これ等の芝居は極めて藝術的價値の少いものであるかも知れない。然るに私達がそれを觀て、常に感銘を覺ゆる所以のものは、その他に然るべき大きな理由があつてのことである。

松王丸が「女房喜べ俵はお役にたつたぞ！」と叫んだあの時の聲は、確かに彼の心底から湧き出でた、ほんとの喜びであつた。併しその次に來れるものは子を愛する親としての熱い涙の悲しみであつたことを忘れてはならぬ。即ち私達は慙て彼が聲を放つて男泣きに泣いたところ

に寧ろ松王丸の「人間」としてのほんたうの尊さを感じる。

而もこれあるが故に、自ら進んで、我が子を主君の身代りと爲し、立派に「義理」を果し得た松王丸夫妻が、今度は亡き子の野邊の送りに親としての熱き愛の涙を充分に注ぐことも出来たのである。さうしてそこに私達はほんたうに尊い「人情」の極致を発見するではないか。

政岡の偉い點も、同じく主君の爲めに我が子を犠牲に供しながら、泰然自若として「義理」を完全に盡し得たその立派な態度に在るであらう。併し私はそれよりも、人皆去りし後、初めて我れに立ち歸つた政岡が、我が子の死骸を抱き占め、「三千世界に子を持つた親の心は皆一つ……」とかこちながら、われを忘れて泣き崩れたあの人間らしい、殊に女らしい、さうして母親らしい悲しみと歎きとに「人間政岡」のほんたうの値打ちを発見することが出来る。

『母性愛!』さうしてそこから出發した美しい「人情」の發露! 『先代萩』が芝居としての藝術的價值を多分に保有する所以のものは「義理」と「人情」この二つを、完全に表現し得た點に在る。

私は「實子殺し」の新聞記事を読んだ際、無意識にも寺子屋の松王丸夫妻を思ひ出し、さら

に先代萩の政岡を思ひ浮べた。さうして「義理」と「人情」とを併せ有するところに我等日本人の世界的誇があるのに、今やそれを全然裏切る如うな人非人が昭和の聖代に存在することを思ふとき、私は限りなき悲しみを覺えずにはゐられなかつた。「義理」を缺く者の多いのが今の世の中! 更に「人情」紙よりも薄いといふのが今日の世相! 併しそれでは日本の國が立ち行かぬ。故に私達は速かにこれが悪弊を一掃しなくてはならぬ。

凡て人生は「義理」と「人情」との葛藤だともいへる。併し同時に「義理」にかたい人は「人情」にも厚いのが一般である。故に「義理」と「人情」とは必ずしも相反すべきものではない。否な寧ろ「義理が人情であり、人情が義理である」といふのがほんたうかも知れない。しかも兩者の根柢を爲すものは、常に「愛」であり「涙」である。

「義理」と「人情」! この二つが大きく統一されることによつて初めてそこに「人間」としての大きな存在を発見することが出来る。故に私は繰り返していふ。……「人間から義理と人情とを取り去つたならば、一體あとに何が残るだらうか」……

村里興復の途

戒嚴令下に於ける特別議會は無事終了した。而も會期僅かに三週間でありながら政府提出の法律案四十六件中、四十五件が兩院を通過し得たことは驚くべき程の好成績であつた。

300

特に農村關係の法律案が第六十七議會以來の懸案であつた米、藪、肥料に關する法律案七件を始めとして、十一件の多きに達したことは農村のため實に祝福に堪へない。

併し有り體にいへば、これ等の諸法案も農村今日の窮乏を徹底的に打開する程の力はありません、故に私達は更に百尺竿頭一步を進めて、これが根本對策の具現に精進しなくてはならぬ。

即ち米穀關係の三法案が上程せられた場合、私が黨代表として討論に起ち賛成演説を試みたに係らず「これ等の諸法案は他日根本對策の樹立せらるるまでの漸定法たるに過ぎない」こと

を力説した所以もそこにあるのだ。殊に眞の農村振興は制度の改正や、法律の制定のみを以てしては、到底達成せられるものでない。故に今後これが實効を收めんとするには農村自らの努力に俟つところがなくてはならぬ。嘗て二宮尊徳翁は村里興復の法を説いて次の如く論じておられる。

村里の興復は「直」を擧るにあり、土地の開拓は「沃土」を擧ぐるにあり、然るに「善人」は兎角に退いて引籠る癖ある物なり、勤めて引出さざれば出ず、沃土は必、卑く窪き處にありて掘出さざれば顯れぬ物なり爰に心付ずして開拓場をなす時は、沃土皆土中に埋りて永世顯れず、村里の損是より大なるはなし。村里を興復する、また同じ理なり、善人を擧、隠れざる様にすを勤とすべし。又土地の改良を欲せば沃土を掘出して田畑に入るべし。

301

村里の興復は善人を擧げ出精人を賞譽するにあり、是を賞譽するは、投票を以て耕作出精にして品行宜しき者を選び無利足金、巡回貸附法行ふべし。此法は譬ば米を臼にて搗が如し、杵は只臼の正中を搗くのみにして、臼の中の米同一に白米となると同じ道理にて、返済さへ滞らざれば社中一同知らずく自然と富實すべし。而て返済の滞るは、譬ば臼の米の返らざるが如し、

是此仕法の大患なり、白の米返らざる時は、村搗となりて折れ砕くる物なり、此仕法にて返済滞る時は仕法萎靡して振はざる物なり、貸附取扱ひの時態々注意し説諭すべし。(二宮翁夜話) 翁の言は極めて平凡である。併し私達は平凡の裡にも大きな教訓を發見し、そこに農村振興の一大哲理を窺ふことが出来る。

『悪貨良貨を驅逐す』といふのがグレンシャムの法則！それが到る處に顯現してゐる今の世の中！善人その影を潜めて、悪人單りはびこる今日の社會！そこに農村の行詰りがあり、國家の大きな悩みがある。

斯くて、人事行政その宜しきを得ざるところに、凡て行詰りの源泉があるといふならば『庶政一新』は先づ以て人事行政の刷新から出發しなくてはならぬ。……何事も『人』が第一だ！南洲遺訓に『何程制度方法を論ずる共其人に非ざれば行はれ難し。人有て後方法の行はるゝものなれば、人は第一の實にして、己れ其人に成るの心懸け肝要なり』とある。

農村關係の重要法案が多數議會を通過した今日！私達はこれが實効を收むべく特に二宮翁の言に聴き更に南洲翁の遺訓に鑑みることの意義深きを覺ゆる。

さうだ！眞に凡ての行詰りを打開し得るものは制度でもなく、法律でもない。それは『人』だ！『人』だ！故に眞に農村更生の目的を達するには、私達總ての農村民が獨り残らず自らその『人』と成るの努力が何よりも必要だ！

わしは佐久間だ！

故佐久間總督といへば、直ちに農事熱心な總督であつたことを思ひ出す。

實際佐久間總督は農事に熱心であり、同時に自身なか／＼の農事通であつた。従つて専門の技師連が、時折總督から意外な質問を受けて面喰つたことの多かつたのも誤りなき事實である。

總督官邸の大修繕が行はれるといふので、總督が可なり長い間南門外——今の佐久間町——の官邸に假寓せられたことがあつた。

臺北廳農會の農場は僕が臺北廳在勤の折、大正五年に東門外に移してしまつたが、その頃は官邸に近き古亭庄に苗圃があつた。……その苗圃で柑橘の苗を初めとして色々の苗木が養成せられてゐた。さうしてこの苗圃で作業監督の任に當つてゐたのが△△君であつた。

ところが、何時の頃からかこの苗圃に股引をはいて尻をはしよつた、六尺豊かの一老人がよくやつて來る様になつた。而もその老人が、うるさい程色々のことを根掘り葉掘りきくのであつた。

「柑橘の苗木はどんな風にして作る？」

「臺木は何が一番よい？」

「歩留はどの位ひある？」

といった様な調子！

△△はうるさい御隠居だなアと思ひながらも、適當にあしらつてゐた。

或日のこと例の老人が何時もの通りの姿でやつて來た。さうして△△君と老人との間に次の様な問答が取りかはされた。

「御隠居さん！ 大變お精が出ますが柑橘園でも初めなさるつもりかね」

「いや、別にそんな考へは持つてゐないが！」

「どこかで御目にかゝつたことのある様な氣もしますが、一體お住ひはこの近所ですか」

「ハア直ぐこの近くだ！」

「この近くだとおつしやると、一體どこの御隠居さんですか」

「わしかな、わしは佐久間だ！」

「わしは佐久間だ！」といはれて△△君はハッとした。さうして直立不動の姿勢を取りながらその老人の顔をよく視ると、それはまがう方なき我等の總督佐久間大將閣下であつた。

△△君の顔は見る／＼蒼白に變つた。さうして自分の無禮をお詫びするのも夢中であつたが、最後におじきを一つしたかと思ふと、そのまゝ一目散にそこを駆け出した。……さうして彼の行先が臺北廳の廳長公室であつたことはいふまでもない。

「廳長殿！ 實はかく／＼の次第で私は飛んでもない粗忽を致しました。併しどんなお詫びでも致しますから、首だけはお助け下さい」と哀訴嘆願した。

「馬鹿つ！ 總督閣下を知らない様なザマで、どして農會の仕事が勤まるかッ」と井村廳長は呷鳴つた。

併し△△君は「軍服姿のあのいかめしい總督閣下なら私もよく存じてゐますが、股引姿のあ

の老人が總督であらうとは夢にも思はなかつたのです」といつた。

勿論△△君はその後も何等の異變なく臺北廳農會に勤め、相變らず苗木の養成に精進を續けてゐた。

佐久間總督の農事に熱心であつた裏面には、かうした喜劇も演ぜられたのであつた。そして總督の農事に精通してゐた蔭には、こんな様なエピソードも潜んでゐたことを忘れてはならぬ。私達はそこに「人間佐久間」の眞骨頂を發見することが出来るではないか。

庶政一新

近頃頻りに「庶政一新」が叫ばれてゐる。無論それは時節柄さもあるべきことだ。併し指導精神の明確でない「庶政一新」はたゞ徒らに事務に墮するのみであつて、結局は一種の口頭禪たるの虞なきを得ない。

私は子供の頃、よく祖父や父から「御一新」の話を聴かされた。さうして幼心にも、それは生優しいことでは到底出来得る仕事ではないと思つた……明治の御一新既に然り、況んや昭和の御一新に於ておやだ！

明治維新の大業は「王政復古」を目標とした。……「武家政治から天皇親政へ！」この目標は確かに正しかつた。目標正しきところに、あの大業達成の根源が在る。従つて眞に昭和維新

の大業を達成せんとするには、先づ以てその目標を明確にしなければならぬ。……目標なきところに眞の「庶政一新」はあり得ない。

然らば明治維新の大業達成の後に於て「躍進日本」の第一期にはいつた明治政府は、一體何處に「國是」を定めて、國運伸展の重責に任じたか。更に明治、大正六十年を通じて、我等日本國民は一體何を目標として、これが「國是」遂行の重任を果したか。

長くも明治天皇は

よきをとり悪きをすて、外國に

劣らぬ國となすよしもがな

と仰せられてゐる。……この大御心こそは明治維新以後に於ける日本の國是であり、政府の指導精神であり、また國民努力の目標でもあつた。

鎖國日本から開國日本へ！

封建日本から立憲國日本へ！

東洋の日本から世界の日本へ！

其くて國民の休みなき眞剣な努力は遂に報いられて、我等の祖國日本は世界の一等國と成り、世界三大強國の王座を占むるに至つた。さうしてそこに私達は「外國に劣らぬ國」となり得たことの大きな誇を感じる。

併し世界の一等國を目指して、まつしぐらに進んで來た我等日本國民が、既にその目的を達したといふならば、我等は更に新しき目標の下に「躍進日本」の第二期に向つて力強きスタートを切らねばならぬ。……さうして私達が「昭和の御一新」を要望する所以のものもそこにあるのだ。然らば昭和の御一新は果して何を目標として進むべであらうか。

明治の御一新は、いはゞ内輪の仕事であつて、單に「日本」だけの維新に過ぎなかつた。然るに昭和の御一新は少くとも「全亞細亞」の維新でなければならぬ。さうしてそこに私達は、第二期に進んだ「躍進日本」の新しき國是を發見するではないか。

この新國是！ それを目標として邁進するところに指導精神のはつきりとした眞の「庶政一新」はあり得るのだ。

昭和の御一新は「全亞細亞」を目標として行はれねばならぬ、而もこの新國是は我建國の大

精神に出發したものであることはいふまでもない。

神武天皇は御東征に方り「天業を恢弘し天下に光宅せん」と仰せられてゐる。……さうしてこれが我建國の大精神であり、更に我肇國の大理想でなくて何であらう。

いふまでもなく「天業」とは「精神文化の建設」である。故に我建國の大精神は農村中心の精神文化を建設するに在つた。さうして更にこの精神文化を普く全世界に押し廣め、全人類に平等の幸福を與へ世界平和の大殿堂を現實の地上に建立せんとするところに、我肇國の大理想はあつたのだ。然るに今や世界のあらゆる國家民族は、何れも都市中心、黃萬金能、享樂第一主義の西洋文化——物質文化——の重壓に悩み切つてゐる。而もこの重壓からあらゆる國家、民族を匡救し得るものは「精神文化」の他にはない。故に今日は建國以來天に受けたこの世界的大使命遂行の爲め、我等日本民族が猛然として起つべき秋である。

亞細亞に國する十億の民！ 彼等の總てに眞の平和と幸福とを與へんとするのが我等の使命！

この大使命に則した新國是の確立！ それによつて初めて國策の遂行は緩急その宜しきを得、

真に指導精神の明確な『庶政一新』はその具體化を見るに至るであらう。

故に私は重ねていふ『庶政一新は新國是の確立から!』

——一・一六・一七——

武士道

新渡戸先生が英文『武士道』をアメリカで出版せられたのは、私が札幌の豫修科に入學したばかりの頃であつた。故にそれは今から三十七年も前のことである。

その頃私達の學校では、スウ・ントンのリテラチュアと。ブッシング、ツィ、ザ、フロントを英語の教科書に使つてゐた。そこに同窓の大先輩がこの名著を公けにしたのだからたまらない。私達はそれを是非とも教科書に追加せられんことを熱心に希望したが間もなくその目的を達することが出来た。

いふまでもなく『武士道』は日本獨特の國民道德である。その獨特な『武士道』を英語を通して研究するといふところに、私達は一種の興味を感じた。さうしてそれによつて啓發せられ

た點も、また少くはなかつた。

昨年十一月二日の晩であつた愛宕山の放送局から『新渡戸博士の勸忍袋』と題する少年講談が三浦樂堂氏によつて放送せられた。然るにそれは私が嘗て先生の御伴をして臺南に出張した際の或る日の出來事を取材としたものであつた。ところが、それと同じ日に私はKといふ仁から一通の手紙を受取つた。それは新渡戸先生の英文『武士道』の邦釋を出版することになつたから、私に序文を書いて呉れといふ相談であつた。

私はこのラヂオ放送を聴き、更にこの手紙を読んで、今は亡き恩師の在りし日の面影を偲びつゝ、色々の追憶に耽つた。……あの英文『武士道』に少からず感奮した若き日の思ひ出！更に臺南の旅館に於ける先生の『武士の情け』に徹底したあのうるはしき言行に、思はず涙したその日の思ひ出！さうしてあの名著英文『武士道』が立派に出來上つたのは、先生自身が眞に立派な武士道の體得者であつたからだと思つた。併しそれにしても、私は『武士道』の影うすれ行く現代日本の情けなき姿を悲しますにはゐられない。

佐賀に『葉隠論語』といふ本がある。この本によつて佐賀藩は代々特殊な精神を養つて來た

といはれてゐる。今その中の『武士道』を説いてゐる一節を読んで見ると次のやうな言葉が述べられてゐる。

『武士道』といふことは死ぬと云ふことだ。言葉を換へて云へば『武士道即死』なのである。凡そ何れか此れかと云ふ場合、即ち二つに一つと云ふ場合早く死ぬと云ふことに『武士道』がある。別に仔細はないのである。この心掛けさへあれば腹が据はつて進むことが出来る。もしやつて見ても、それが何の役にも立たぬ場合は犬死だなど云ふのは上方風の打算的な武士道である。二つに一つの場合選んだそれが何かの役に立つか立たぬかはわかつたものでない。

誰にしても生きる方を望むのは人情であるから、生きる事を考へるのはもつともではあるが此二つに一つの場合、生を撰んだとき、それがうまく圖に當らなかつたならば世間から腰抜けだと云つて笑はれるのである。そしてその圖に當らぬか當るかの境はまことにわかり難い、従つて甚だ危いことである。

もし死んだが圖に當らなかつたと云ふやうな時には犬死よ氣違ひよと云はれもしやうが、し

かし腰ぬけに比べたら恥ではない。ところが『死即武士道』である武士道に於ては、そんなことは先づ大丈夫である。毎朝毎朝死ぬのである。かくして常住死身になつて居るときは武道に於て自由を得るは勿論一生落度がなく、自分の天職を仕おうせるのである……

葉隠論語に就ては世間色々の批評はあるが、併し以上はいかにもよく『武士道』の真髓を説明してゐるではないか。

『武士道』とは何ぞや？『武士道』とは『死道』である！而もその『死道』たるや、決して打算的であつてはならぬ。即ち生死を超越して、先づ死んでゐるところに眞の『死道』があり同時に眞の『武士道』があるのだ。従つて眞の『武士道』は『殺すこと』ではなく『死ぬこと』である、ところが近頃の人は『殺すこと』には極めて勇敢であるが『死ぬこと』には頗る臆病であるかの如くに思はれる。斯くて『武士道』の影うすれ行くところに現代日本の不安な世相の原因があるといふならば、私達は速かにこれが原因の排除に努めなくてはならぬ。故に私はいふ！眞の不安一掃は『武士道日本』の再建から！

『クサンチヒズム』

ギリシヤの古い書物に『農業に必要な第一要件は良き妻を嫁ることだ』と書いてある。また世諺に『悪妻は百年の不作だ！』ともいはれてゐる。

單り農業といはず、凡ての人生に一番必要なことは『良き妻』を嫁ることだ。何となれば、それが臆ては『良き母』と成り得るのだから！

昔から偉人の背後には必ず『良妻賢母』があるといはれてゐるが、『内助の功』とはこんな如うな優れた婦人の力を讚美した言葉たるに過ぎない。ところが、たまには例外がないでもない。即ちソクラテスの如きは確かにその一例だ。ギリシヤの大哲人ソクラテスの母は産婆を業としてゐたが、まことに偉い婦人であつた。さうして彼の教育法や哲學研究法はその貴い暗示

を母から受けたとさへいはれてゐる。併しそんな偉い母親に育てられたソクラテスでも細君には氣の毒な程恵まれなかつた。彼の細君はクサンチツベといつたが、大哲人の細君には似てもつかぬ様な厄介極まる女であつた。

日本でも『亭主を尻に敷島道』などといつて、平氣で夫を尻に敷くといふ不心得な細君がないでもない。さうしてこんなのを『かゝア天下』といふのであるが、ソクラテスの細君も丁度この類であつた。……即ち彼の女はなか／＼のガミ／＼屋で、常に夫を尻に敷き、彼の偉さを少しも理解してゐなかつた。

或日勉強に懸命なソクラテスの側にやつて來た細君は、何時もの通りガミ／＼いつた。無論ソクラテスは研究に熱中してゐるから、彼の女には一瞥も與へなかつた。……それに不満な彼女は丁度洗濯をしかけてゐた汚い盥の水を頭からさんぶとぶちかけた。

併しソクラテスは落ち付いたもので、『ア、また例の雷が鳴るわい』といひながら、少しも相手にしなかつた。……そこに私達はソクラテスの眞の偉大さを發見するではないか。

それにしても、あの大哲人を夫に持ちながら、少しもその値打を理解せず、常に彼を尻に敷

いて、いちめぬいて來たクサンチツベこそは實に天下の大馬鹿者であり、世界一の愚な女であつたといへる。

夫を尻に敷いて、いちめぬくことを、西洋では『かゝア天下』とはいはないが『クサンチベズム』といつてゐる。さうしてこの名稱がソクラテス夫人の名前から生れ出たといふのだから物凄くないか。

これは昔語りだ。併しこんな話は今でもザラにある。

數年前、東京で『萬國婦人子供博覽會』が開かれた。その際ドイツからやつて來たハーゲンベックの曲馬團に〇〇君といつて有名な猛獸使ひの達人がゐた。

百獸の王たるライオンでさへ、彼の前には首うな垂れて猫の如うな柔順さを示す。ところがこの猛獸に君臨する王者の如き〇〇君も遂に細君の『ヤキモチ』だけは如何ともすることが出來なかつた。

夜分少し遅くでも歸つて來たものなら、それこそ大變だ。彼の女は夫の胸倉をしつかとつかんだが最後、容易に離さうとはしない。……無論こんな場合には彼の女の額には水牛の如うに

大きな角が二本にゆつと出てゐるのはいふまでもない。

〇〇君はこの恐ろしい細君の襲撃には閉口したが、何時でも最後には猛獣の檻の中に逃げ込んで、そこに彼自らの安全地帯を求めるといふ話！

自分の大事な夫を猛獣の檻の中に追ひ込むといふ亂暴な細君！更に細君よりは猛獣の中に安全感を求めねばならぬ程の氣の毒な〇〇君！『妻難』もこゝまで進むと一種の悲哀であり、皮肉である。

古今東西を通じて『道理』は常に一つだ。……古代ギリシヤに於て『クサンチビズム』がよくなかつたといふならば現代日本に於ても『カカア天下』の宜しい筈がない。

殊に『内助の功』は偉人の家庭のみに限つたわけのものではない、私達凡人に取つては、なほさらそれが必要なことだ。……故に女の貴い使命は、何といつても『良妻賢母』と成つて、遺憾なく『内助の功』を収めることだ！

空 氣 と 米

アメリカの氣象學者ハンチントンは、文明と氣候との關係をよく研究してゐる學者である。

この人の著書に『世界的勢力と進化』といふのがある。それを讀んでみると、彼は『生物に必要な要素が三つある。第一が空氣、第二が水、第三が食物である。さうして生物は或期間飲まず食はずに生きてゆくことが出来るが、空氣なしには瞬時も生存が出来ない。故に空氣その他外界の自然が生物に及ぼす影響は非常なもので、生物の進化はこの空氣その他外界の自然に支配されることが多い。従つて生物にとりて一番大切なものは空氣である』と説いてゐる。

この説は別に嶄新なものではない。併し私達はこの平凡な主張の中にも大きな眞理を發見することが出来る。

人間の生存に極めて必要な要素でありながら、それが餘りにも普遍的であるために、その存在さへも打ち忘れてゐることがある。……『空氣』の如きも確かにその一つだ。

私達は二六時中、空氣の中に生存してゐる。故に空氣を離れて私達の生存はあり得ない。然るに、もと／＼空氣は天興のものであり有ゆる人類、有ゆる生物の共有財産である。殊に空氣には品切れの心配もなく、更に物價騰貴の虞れもない。故に空氣は學者に取りては、極めて重要な問題であるが、人間の實際生活に觸れた問題としてはそれ程でもない。ところが、食物の問題になると、さう簡単に片付けるわけにはゆかぬ。

この間或所で或人が眞面目に話してゐるのを聽いてゐると『近頃國策々々とやかましくいつてゐるが、國民生活の安定を計るには、空氣と同じ様に、米をたゞで國民に供給することが必要だ。故に國家は國民に米をたゞで食はず國策を速かに工夫すべきだ！』といふのであつた。

『空氣と同じ様に國民に米をたゞで食はず國策の樹立！』若しそれが出来たならば、それこそこの世は、さながらの天國であらう。併しこの國策實現のためには、國家は石三十圓としても毎年二十億圓の國費を用意しなければならぬ。故に財政上から考へたゞけでも、これが實

現はなか／＼容易のことではない。

そこになると、天興の『空氣』は實にありがたい。無盡藏で、たゞで、而も有ゆる人類の共有物であるから貧富の區別なく誰でも一様に呼吸が出来る……尤も同じ空氣であつても『良い空氣』もあれば『悪い空氣』もある。即ち一般的にいへば、都會の空氣は悪く、農村の空氣は良し。

従つて新鮮な空氣に恵まれた農村人は、都會人よりも遙かに健康だ。……故に『農村は國民元氣の源泉であり、都市はその墓場である』とされてゐる。

私は今麻布の高臺に住ひしてゐるが、東京としては可なり空氣の良い地區に屬してゐる。それでも時折郷里の自宅に歸つて氣の付くことは、如何にも空氣のよいことだ。……朝の寢醒めの心地よさ！ それは確かに空氣の良い證據である。

新鮮な空氣に恵まれた農村！ その新鮮な空氣を思ふがまゝに呼吸し得る田園生活の難有さ！ この一點に於て、農村には一人の貧者もないわけだ。

ところが、近頃悲しむべきことは、健康であるべき筈の農村人が寧ろ都會人に劣る様な成績

を統計の上に示して来たことだ。即ち最近十年間の平均によれば、人口千に對する死亡率は都市よりも郡部の方が二人も多いがこれは果して何を意味する？

現在全國一萬二千の町村中その約三割に當る三千四百二十の町村には醫師が一人もゐないといふが實に嘘の様な話だ。……自然に恵まれた農村も、文化の施設からはこんな風に見離されてゐる。故に私は十數年來、農村の醫療機關の充實を主張して来た一人である。ところが、昨今内務省邊でも、國策としてこの點に重きを置く計畫を樹てたらしいが、遅播きながらまことに結構なことだ。

併しそれよりも、もつと必要なことは、農村民に先づ榮養を充分に與ふることではないだろうか。新鮮な空氣を滿喫しながらも、その體格が段々劣惡になり行く農村民の現状！それは確かに榮養の充分でない證左である。

自分で作つた米でさへ思ふ様に食へない程行詰つた農村の生活！この經濟生活の行詰りを打開せずしては、例令醫療機關が整備したところで、その健康保全是到底不可能である。

私は全國民にたゞで米を食はず國策を考へる前に、せめて農村民に自分の作つた米を滿腹に

食ひ、充分の榮養を攝り得ることの出来る様な政治を速かに確立して見度いと思ふ。……而もさうすることが「國民元氣の源泉」を永久に保全する所以でもある。

二つの「金時計」

私は「金」よりも「銀」更に「銀」よりも「鐵」が好きだ。従つて「金時計」には餘り關心を持たない。ところが今私の家に二つの金時計があるのが如何にも不思議であるが、それには次の如うなエピソードがある。

326

明治三十八年に札幌農學校を卒へた私は、翌年の二月、新渡戸先生に連れられて臺灣に赴任した。出發に際し私は父から貰つた旅費の一部を割いて銀座の天勝堂で薄型の「鐵時計」と「革の紐」を買つた。さうして自分ではそれがとても垢抜けのした買物であると考へた。

私が臺灣總督府からドイツに留學を命ぜられたのは、明治四十二年であつたが、その際にも私は矢張りこの時計と紐とを携帯した。

翌四十三年の夏ベルリン大學在學中の私は、總督の命により、同僚の一人と共に歐洲の國々を視察することになつた。出發に先立つて彼は私に「金時計」の購入を勧めた。……「鐵側の時計と革の紐では世間が紳士扱ひをして呉れない、従つて視察にも不便だから、この際は非とも金時計と金鎖を買へ！」といふのがその理由であつた。

併し私は「金時計の持主でなければ相手にして呉れない様な俗物にはこちらから御免を蒙むる」と、氣焰を吐きながら、相變らず銀座で仕入れた例の時計と紐とで旅行の途に就いた。「物よりも心！ 時計の光よりは人格の光り！」……さうした氣持で行く先々の國々で色々の人に會つて見たが、別に不便を感じることもなく旅行を終へて、再びベルリンに歸つて來た。

327

斯くて二ヶ年の留學も夢の間に過ぎ歸朝の日の近づいた明治四十四年の秋に、私は父への土産として「金時計」と「金鎖」とを買つた。

或晩それを胸にした私は、友人の五學士を訪ねた。すると彼は、「オヤ！ 金時計を買つたね」といふから「これは俺のぢやないよ、親父への土産だが一つ見て呉れ」といつて、それを彼に渡した。

彼は暫時それを打ち眺めてゐたが、俄かに「オイ！ もう一つ買へ！」といった。……「それはまたどういふわけ？」と問ひ返すと、彼は次の如くに説明した。

「君が例の鐵側時計と革の紐である以上、君のお父さんは氣持よくこれを受取るわけにはゆかんではないか。……僕は田舎住ひで別に金時計はいらぬ。お前こそそれが必要でないか。僕はお前の志だけで澤山だ。この時計はお前に遣らうといはれるにきまつてゐる、だからほんたうにお父さんを喜ばして、親孝行をする氣なら、君の分をもう一つ買ふことが必要だ！」

私はK君のこの親切な道理ある言葉に、いたく心を打たれた。さうして親孝行になるなら、自分の「金時計」を買ふのもよからうと決心した。

斯くて歸朝の途上、ロンドンでアメリカ製の丈夫な「金時計」を買ひ入れた。……爾來二十有六年今や腕時計がひとり巾を利かす時代なのに、依然として私の胸にぶら下つて少しの狂ひをも見せないのが、その時計である。

郷里の父は歸朝土産の金時計を心から喜んで受けて呉れた。さうしてその後外出の折にはよくそれを携帯したが、その爲めに次の如うな悲喜劇も演ぜられた。

或日父は近所の温泉に行つての歸るさ、その金時計を道に落したまゝ歸つて來た。それから數日の後、それを拾つた隣り村の人がわざ／＼訪ねて來た。さうして「これはあなたの時計ではないですか」といはれて、初めてそれを落したことに氣がついたといふ程の呑ん氣さ！

父は御禮の意味で少しばかりの心付けをしたが、それを元手に酒宴を張り、少し飲み過ぎた結果、足し前をして損をしたのが、その拾ひ主であつたとは後での話！

父は昭和三年の春四月、八十二の高齡を以て靜かに逝いた。さうして金時計は遺言により私の長男に形見として残された。

當時中學の三年生であつた長男に、私は慈愛深き父の遺言を説いて聽かした。さうして「この時計はお前が大學を出るまで僕が預つて置く、萬一お前がその志を達し得ない場合には、この時計はお前のものではないぞ！ だからお祖父様の形見がほんとにほしいと思ふなら、今からうんと勉強してその目的を達成するがよい！」と訓した。

それから歲月は流れて正に八年！ 幸に長男は本年三月、京都帝大を曲りなりに卒業することが出來た。斯くて彼は去る五月徴兵検査の爲め郷里に歸り、祖父の墓前に學校卒業の報告

をも済して歸つて来た。

間もなく私は形見の金時計を長男に渡した。それにしても私は父に對する子としての義務、更に子に對する親としての責任の一端を果し得たことの悦びを感謝せずにはゐられない。

——二一・七・二三——

夏

夏！ 夏が来た！ さうして今はもう眞夏だ！

夏は暑い。殊に今年梅雨明けが遅れて涼しかつたところに、俄にきびしい暑さが遣つて来たので特にそれが身にこたへる。

都の暑さを逃避する人々の群は雪崩を打つて海へ！ 山へ！ さうして村へ！

「時」と「金」とに餘裕のある人達にはそれもよからう。併し夏の海と山と村とは、どう考へて見ても、それが『日本の姿』であるとは思はれない程、西洋臭くなつてくるが、それをそのままに差し置いて、果してよいものだらうか？

『都會色』と『西洋色』とが、年毎に濃くなりまざる「海」と「山」と「村」！……新鮮で

あるべき筈の海と山との空気が「不良」のために汚れを覚え、清く麗はしき村の土の香も毒々しい脂粉の匂ひに押されて、だん／＼薄れゆくことの悲しみ！

眞に身體の虚弱な人が健康保全を目的とする避暑なら、それも悪くはない。併しそれよりもつと大切なことは、暑熱を克服することだ。

あの暑い臺灣に於ける私の生活は、十八年も続いた。併しその間避暑を思ひ立つたことは、たゞの一度もなかつた。……それでも別に健康を害したとは思はない。故に私は暑熱克服の努力さへあれば、暑熱避暑の必要はないのだと考へる。

私だつて夏は暑さを感じる。併しその暑さは汗みどろになつて働くことによつて、完全に克服することが出来る。故に私はこの夏も東京にゐて、汗で暑さを洗ひ流しつゝ、私一流の暑熱克服の仕事に精進するつもりだ。

近頃頻りに「南進論」が叫ばれて來たが、これは時節柄まことに結構なことだ、天然資源に富んだ南隣の國々！そこに經濟的に、文化的に、また平和的に發展すべき運命に置かれたのが我等の同胞！

併し南洋は常夏の國だ！一年中夏ばかりの國で、朝から晩まで熱いのが南洋の特色！而も「光」と「熱」とが強烈であるところに天然資源の豊かな南洋の値打はあるのだ！

嘗てベンヂャミン・キットは「熱帯を支配するものは世界を支配す」といつた。併し熱帯を支配せんがためには、先づ暑熱を支配するの訓練が必要だ。故に「南進論」の目標は、暑熱の克服であり、世界の支配權獲得でなければならぬ。

暑熱避暑の享樂に浸るだけの「時」と「金」とを持つてゐる人は仕合かも知れぬ。併しその「時」と「金」とを暑熱克服の訓練に使用することの出来る人は、より以上に幸福な人だ。何故なれば、それが聽ては熱帯を支配し、世界を支配する人にも成り得るのだから！

暑熱は逃避すべきものではなく克服すべきものだ！

行け！ 滿天下の青年諸君！ 太陽に最も近き綠熱の國南の島へ！

圓 タ ク

今東京に何萬臺の「圓タク」があるか僕は知らない。併しあの多数の「圓タク」が街頭を流し廻つてゐるのは便利でもあり、またうるさくもある。さうしてそこには「圓タク」獨特の哲學もある。

一昨年の秋であつた。文部省の前で拾つた「圓タク」の運轉手君頗る愉快な男で、盛んに政治を論じながら、ハンドルを動かして行つた。

ところが、それから半月ばかり経つてからのことである。本郷の駒込で拾つた「圓タク」の運轉手君が「旦那！ 何時かお目にかゝつたやうな氣が致しますね」といふから、よく注意して見ると、それがまた、先日と同じ「圓タク」であつたから面白い。

「廣いやうで狭いのが東京です。これも何かの因縁です。またこの次何處かでお目にかゝります」といつたのが、その運轉手君！ 併し遺憾なことには、その後未だその「圓タク」には廻り合はない。

それから昨年の秋のことであつた。嫁入り仕度にいそがしい娘を連れて買物に出かけた際、麻布の霞町で「圓タク」を拾つた。ところが運轉手君の名札に「下水流一男」と書いてある。

「君の名字はめつたにない名字だが、君は鹿兒島ではないかね」とたづねたのが僕！ さうして「ハイ！ 始良郡の帖佐村です」と答へたのが、その運轉手君！

「君は僕の選挙区だよ」といへば「それでは、あなたは東郷先生では御さいませんか」と運轉手君はいつた。斯くてその日は三越におろして貰つて、そのまま別れた。

去る六月十三日の午前のことである。商工省から出て來た僕は、昭和通りで「圓タク」を呼び止め溜池の東京鑛山監督署まで三十錢で行けと交渉した。

約束は直ちに成立したので、その「圓タク」に乗つて見ると、これはまた不思議！ 運轉手君の名札にはちやんと「下水流一男」と書いてあるではないか。……「オヤ！ 下水流一男君

暫時だつたね、その後お變りはないかね」と話しかくれば「東郷先生でしたね、御當選でお目出度う存じます」と、下水流君はいつた。

聽て「圓タク」は鑛山監督署の玄關に横付けになつた。下車に際し、僕は五十錢奮發した。さうして同郷の誼みに二十錢は安いものだと思つた。

「圓タク」の出初めた頃は、市内は一圓均一であつた、「圓タク」の名の出た所以もそこにある。併しその後ガソリンの値下りに連れ何時の間にか「市内一圓」の掛札は「空車」と書き換へられた。

爾來「圓タク」の賃錢も均一でなく、距離の遠近により相違が出来た。従つて乗車の際、一談判を要する時代となつた。併し大低の距離なら、五十錢が標準になつてゐる。

今月の初め頃であつた。農林省から自宅まで「圓タク」に乗つて何時もの通り五十錢支拂つたところ「五十錢ぢや困りますね、一圓五十錢いただきます」と運轉手がいふではないか。

「一圓五十錢とは驚くね、併し最初に約束しなかつたのは僕の落度だから、今日は君の要求に應ずるが、餘りばるのは君の爲めにならんぞ」といつて別れた。……世の中にはこんなひど

い運轉手もある。

去る七月二十六日の午前十一時過ぎ、學校から沼津に水泳に行つてゐた二男坊が歸つて來るので出迎ひの爲め麻布櫻田町の滿洲國大使館前で「圓タク」を拾つて、そのまゝ東京驛にかけた。

驛に着いて初めて「小錢入れ」を忘れて來たことに氣づいたが、既にあとの祭！止むなく五圓紙幣を出して釣錢を求めた。運轉手君が「四圓しかない」といふから、「それで澤山だ！君に一圓上げる」といつたが運轉手君なか／＼承知しない「一圓は多過ぎます、五十錢で澤山です。私も麻布ですから後でお宅へ頂戴に参ります、お宅を教へて置いて下さい」といふ。

併し僕は運轉手君を待たして置いて驛内の賣店にかけこんだ。さうして森永の「ピース」を一つ買った。今度は賣店に釣錢がなく、驛の出札掛を煩はして、初めて釣錢を呉れた。斯くて十五分の後、五十錢玉一つ貰つた運轉手君は、ニコ／＼顔で、氣持よくお禮をいつて歸つて行つた。……世の中にはこんな立派な運轉手君もゐる。

歸りがけに近所に住つてゐる親類の前を通ると、五つになる男の子が門前で遊んでゐた。僕

は例の『ピース』をポケットから出して子供に遣らうとした。併し子供はそれを受け取らうともせず、さつさと家の中へ逃げ込んでしまった。後で子供の母にきいて見ると、『往來で物を貰つてはならぬ、人取りの小父さんがゐるから』と日頃きびしくいひきかしてあるのが少し薬が效きすぎた結果だと判つた。それにしても親類の僕までを人取りの小父さんと思ひ込むところに子供の無邪氣さがある。

同じ『圓タク』の運轉手でも十人十色！ 併しそこにほんたうの人生は在るのだ！

—— 一一・七・二九 ——

蟻 地 獄

「地獄」といふものが、ほんとにあの世に在るのかどうか、まだ行つて見たことがないから私にもよくはわからない。

併し世の中がせち辛くなるにつれて、いろ／＼な「地獄」が出来て来る。……『試験地獄』

『借金地獄』等々！

尤もそれ等は凡て一種の架空的な形容詞に過ぎない。ところが現實の世界に嚴存するたつた一つの「地獄」があるが、それは「蟻地獄」だ。

近頃私のうちの子供達が、頻りに「蟻の實際生活」を研究してゐる。私も何時の間にか、それに釣込まれて、興味を持つ様になつた。その子供達が先日縁の下にある小さな摺鉢型の穴を

見付けて「あれは何です？」と訊くので覗いて見ると、それは一個の「蟻地獄」であつた。

「何んだ！ 蟻地獄ぢやないか！ お前達は、まだ蟻地獄を知らないのか？」

「オヤー！ これが蟻地獄ですか……学校で動物学の時間に本では教はつたが、まだ實物を見たことがなかつたのです」

「それでは、質ねるが、蟻地獄の正體は一體何だ？」

「ウスバカゲラフの幼蟲です」と中學三年生の二男坊は答へた。

私達は幼少の頃、よく椽の下にもぐり込んで「蟻地獄」を見付け、穴の中にそつと唾を落とし、蟻が落ちこんだ如うに見せかけ、中から出て来るあのグロチックな幼蟲を捕へては喜んだものだ。

然るに私の子供達が、今頃漸く「蟻地獄」の實物を見たといふのを聞いて私は都育ちの子供達を氣の毒だと思つた。

蟻の生活を研究してゐる子供達は、今度は「蟻地獄」の研究をも始めることになつた。

椽の下からいくつかの「蟻地獄」を掘出して來てはそれを砂と共に一つづつ小さな硝子器に

容れて置くと、何時の間にか立派な摺鉢型の穴をこしらへる。

その中に蟻をほうり込めば「蟻地獄」は直ちに活動を始める……彼は摺鉢の底の方から砂を捲るがしながら、もく／＼と起きあがつて來る。さうして例の缺で盛んに砂をはね上げる。その勢は小氣味のよい程、素晴らしく力強いものだ。蟻を捕へた「蟻地獄」はそのまゝ再びそつと砂の中にもぐり込む。

子供達はそれを見て非常な興味を感じたらしい。併しそれよりも、もつと大きな教訓を得たのが、私自身であつた。

凡そ生物は生きんがためには食はねばならぬ、「蟻地獄」が成蟲に成つて「ウスバカゲラフ」に化けるまでには食ふことが必要だ……その必要な食物を獲んがために彼は「陥穽」を作るのだ。

併しどう考へて見ても、敵を「陥穽」に陥れる遣り方は、惻口だといへば惻口かも知れないが、如何にもそれは卑怯な仕方だ……ところが人間にも丁度それと同じ様な仕打を平氣でやる手合が敢て少くないから堪らなう。

私がベルリン留學當時のことであるから今から二十七年も前のことだ。或日懇意な獨逸人の宅で十歳ばかりの少女に出會つた。無論彼の女は初めて日本人を見たといふ。私は「何か日本に就て知つてゐることがあるなら話して呉れ」とたづねた。

「日本はいまにきつと偉くなるだらう。何故なれば、日本人は蟻の如く、蜜蜂の如く勤勉な國民であるからと、學校の先生が教へて呉れました」と彼の女は答へた。

「蟻の如く、また蜜蜂の如く勤勉な國民！」それが日本人だといはれたとき、私はハッと思つたが丁度腦天から五寸釘を打込まれた様な氣がした。さうして「よし！ おれも日本人だ、みんなに負けない様に努力しなくてはならぬ」と決心した。……それにしても、あの時私をすつかり感激させたあの可憐な少女は今頃どうなつてゐるだらう？

「蟻」は勤勉な動物だ。その勤勉な蟻を「陷穽」に陥れ、欺し打ちにするのが「蟻地獄」だといふならば、それは確かに蟻にとつては地獄だ。

「地獄の沙汰も金次第！」……勤勉そのものゝ様な蟻でも金には縁が薄い。従つて「蟻地獄」の「陷穽」に落ち込んだが最後、そこには何等妥協の餘地がない。故に彼はそのまま、わけも

なく生命を取られる。

人間は常に正しい道を歩まねばならぬ。人間生活には斷じて陰謀や術數や欺瞞があつてはならぬ。故に私達は「陷穽」に落ち込み、欺し打ちに會つて、生命を取られる、あの勤勉な「蟻」にはなるとも、「陷穽」を作り蟻を陥れ、欺し打ちにする様な、あの卑怯な「蟻地獄」になつてはならぬ。

——一・八・二——

或日の南洲翁

昨年の八月二十三日！私は硫黄谷温泉霧島館の一室に、早朝からたゞ一人靜かに『萬葉集』に讀み耽つてゐた。

丁度午前十時頃であつた帖佐村の東條、市來兩長老外二名の方々が所用を以て來訪せられた。用談は頗る簡單に片付いて、後は楽しく小半日を清談に過した。

その際色々面白い話を聞いたが、東條直太郎翁の南洲先生に關する直話の中には特に感銘を覺ゆる多くのものがあつた。

直太郎氏十六歳の時、南洲先生の御伴をして日當山温泉に一週日を過したことがあつた。無論忠僕熊吉も同行してゐたことはいふまでもない。

熊吉は直太郎少年を何時も呼び捨てにした。……『オイ直太郎飯を炊け！』といった調子！ところが南洲先生は決して呼び捨てにはせられなかつた。先生は必ず『直太郎どん！』と呼ばれたといふ。……そして私達はそこに英雄の奥床しい半面を窺ひ得て、一種のなつかしさを覺ゆる。併しそれよりも、もつと私を感激せしめたのは次の如うな物語りであつた。

直太郎少年は仕事の合間にはよく新川に絲を垂れて楽しんだ。或日のこと彼は『先生！いかゞですか、釣にお出かけになつては？』と先生に誘ひをかけた。

『釣針が餘分にあるなら僕も行かう！』といつて出かけられた。直太郎少年は自分の針のことはすつかり忘れてしまい非常な興味を以て先生の方を一生懸命に見守つてゐた。

間もなく先生の釣針に相當な奴が喰ひ付いたらしかつた。先生は靜かにそれをあしらつてゐられたが、釣り上げられたのを見ると、それはびつくりする程の大きな鯉であつた。

『先生！先生は山の獵だけかと思つてゐましたが、川の漁もなか／＼お上手で御座いますね！』

といつたのが直太郎少年！

「イヤ！これは儂が釣つたのぢやなか、水神からのお授かりもんどわす」といつて呵々大笑せられたのが先生！

南洲先生は確かに大きな鯉を釣られたのだ。然るに先生は「儂が釣つたのぢやない」といはれた。何といふ謙遜な態度だらう。……自分の手柄をすっかり忘れてたど神のお授けだと観ずるところに、南洲先生の偉人としての大きな存在を發見するではないか。

近頃は人間が小俐口になつて、他人の手柄でも、平氣で自分のものに仕てしまふ世の中だ！而も大小幾多の天狗共が、互に鼻を突き合はして、押し合ひへし合ひするところに、今日の憂ふべき行詰の總てがある。

自分の釣つた一尾の鯉でさへ神與のものだと考へる程の南洲先生！だから自分の尊い命も、決して自分のものだとは思つてゐられなかつたに違ひない。従つて神より授かつた自分の命は何時でも神にお返しするだけの覺悟がちゃんと出来てゐた。……先生が少しも死を怖れず、常に自分の命を君國のために投げ出して居られたのは、この大精神に徹底して居られたからのことだ！

「没我の心境！」そこに徹底して初めて眞の偉人は出来上るのだ。……「釣り」に現はれた南洲先生の大人格！さうして今日の日本が熱望するところのものは、さうした大人格の出現でなくて何んであらう？

月日の經つのは早いもので、今日は丁度この話を聽いてから滿一年になる。而もその時受けた私の感銘はいまだにそれを取り去ることの出来ない程の強さだ。

然るに東條翁はその後久しからずして惜しくもこの世を去られた、従つて私はあの元氣のよい翁の感銘深き話もう永久に聽くことが出来ない。……それを思ふとき、私の感銘は更に深く新しきものがある。

田園の青年に與ふ

「若人の力をこめてうちおろす鉄のあとより道ひらけり」

今や我國の農村は行詰つてゐる。従つて樂しかるべき筈の田園生活は不安であり、そこに色色の不満もあらう。即ち農村の現状は樂しい春でなくして寧ろ悲しい冬であるかも知れない。併しその悲しい冬を征服して、樂しい春を迎ふる努力こそは農村青年の果すべき大きな使命ではなからうか。

私は先年種子ヶ島に遊んだことがあつた。いふまでもなく鐵砲傳來に就て興味深き史實を有するのがあの島である。併しそれよりも島の南端南種子村で聞いた「社會奉仕の一美談」こそ私達にとりては實に大きな教訓であつた。

南種子村砂坂から立石を経て島間に至る間は、嘗て全然道路がなかつた。村の人達は何百年といふ長い間、何時でも干潮の時を見計ひ濱邊傳ひに岩の上を跳びくしては、一里の道を通つてゐた。併し満潮になると、ずつと陸の方を廻り道して三里も歩かねばならなかつた。ところが明治の初めに當り、たつた一人の男の力でこゝに「道」を作らうと決心するものが現はれた。それは砂坂生れの百姓孫左衛門その人であつた。

孫左衛門は何不自由なき地面持の百姓であつた。ところが不幸なことには子供に運が悪く、幾人かの子供達を次から次に亡くして、今ではたつた一人の娘が残つてゐるだけであつた。即ち彼には餘りにも悲しい冬の日が長く續いた。而も残されたその娘さへ今は不治の病に犯され餘命いくばくもないといふ有様！

娘の枕元に靜座しながら自分の悲しい運命を考へて見たとき、孫左衛門はつくづく我が身の情けなさを感じた。さうして自分も娘といつしよに死なうかと考へて見たことが一度や二度ではなかつた。

ところが或日彼は非常の決心をした。……「生れ付いた不運であつてみれば悔んでも詮ない

ことだ。亡くなつた子供達の供養の爲めに、また自分の心の慰めの爲めに、何か一つ村人のためになるやうな仕事をしてやらう」と考へ、遂に彼は砂坂立石間の海岸道路を獨力で開鑿しようとして決心した。

この決心をした孫左衛門は、直ちに山鉾を振つて道路の開鑿に着手した。最初の日に二間ばかり道路を開き、生々とした土の香をかいだ孫左衛門の決心は、更に幾段の堅きを加へた。……さうして今や彼の心には神の如く佛の如く清く正しく強き力が宿つてゐた。斯くて毎日早朝から野良仕事に出かけ、それが終ると日の暮れるまで、たつた一人で一挺の山鉾を便りに側目もふらず道路の開鑿に精進を續けた。

このことを初めて知つた細君は言葉をつくし、涙を流してその仕事を止めて呉れと頼んだ。無論彼はそれをきゝ入れなかつた。村の人達は無茶な奴だ、娘の病氣で氣が狂つたのだと冷笑した。併し彼は村人の冷笑悪罵には耳をも籍さず、たゞ一心不亂に自己の所信に向つて邁進した。……彼の打振る鉾の先からは火花が散つた。さうしてそこには一歩／＼新しい「道」が開けて行つた。

仕事を始めてから丁度二ヶ月目であつた。病床の娘は遂に歸らぬ旅に赴いてしまつた。無論孫左衛門の悲しみは一通りではなかつた。併し彼はこの限りなき悲しみに打ち勝ちながら、村人の爲めに彼の仕事を熱心に續けた。行程の進むにつれて豫期しなかつた幾多の難關にも遭遇した。併しどんな難關障礙も今や鐵の如く固き彼の決心を動かすには足らなかつた。

娘供養の讀經よりは、村人の爲めに眞心こめて打ち下す山鉾の跡より續く新しき道路こそ、眞に亡くなつた子供達を極樂浄土に導くべき天道なりと考へた。而も彼の努力は空しからずして遂に報いらるゝの秋が來た。即ち五年後の明治十年八月には、砂坂立石間一里の難所に牛馬も自由に通り得るやうな立派な新道が完成された。……一心こもれば一挺の山鉾にも遂に「道」を開くの力はある。

私は今こゝに農村の青年諸君に向つて孫左衛門と同じ様な仕事を爲せよと要求するものではない。併し彼が我が身の不運に屈せず、猛然として起つてこれを克服し、更に村人の爲めに何人も爲し得なかつた大きな仕事を完成するに至つたその「意氣」と「努力」とに大に學べと要求する。……否な今日の青年諸君に斯くの如き社會奉仕の大精神があつたならば、行詰つた農村

生活打開の「道」は自から開け来るであらう。

鉄をとつて、大自然の眞只中に起てる農村の青年諸君！ 諸君の打ち振る一挺の鉄は、曠に諸君の圃場を耕やすのみがその使命ではない。諸君が満身の力をこめて鉄を大地に打ちこむとき、そこに躍進日本の進むべき大道は自から開けゆくのだ。

起て！ 農村の青年諸君！ 起つて以て諸君自らの運命を開拓すると共に、この國家的大使命遂行の爲めに、諸君の熱烈火の如き「意氣」の總てを傾倒せよ！

——一・八・二〇——

忙しかった一日

去る八月二十一日はほんとに忙しい一日であった。

早朝から來客が多かつたが、午前九時には河野、中馬、永山の三君がお見えになり、間もなく縣の阿部經濟部長が訪ねて來られた。

四人の方々が去る七月二十二、三兩日の縣下風水害の實狀をつぶさに承ることが出來た。

斯くてその善後策に關する運動方に就ては、在郷代議士諸君の上京を待ち、改めて在京代議士會を開いて相談することにしたが、不取敢煙草増反の件につき陳情のため四君を案内して專賣局に出かけたのは、もう十時に間のない頃であつた。

實は豫ねて病臥中の愚妻が數日前から高熱に悩まされてゐるので、外出が出来るかどうか氣

づかつてゐたが幸ひその日は少し落付いてゐるので出かけることが出来た。専賣局長官や收納部長その他を歴訪して増反の陳情をなし、さらに川越大藏次官を訪ねて、水害の救済問題に就て懇談を重ねた後、四君と別れ急いで帰宅したのが正午に間近い頃であつた。然るに留守中病人には變化がなかつたが、別に豫期しなかつた事件が突發してゐた。

といふのは、昨年嫁に遣つた娘が、この二十五日頃お産をする豫定になつてゐたのに、今朝からお腹が痛み出したといふのであつた。東京では夫婦切りの暮しであるのに、婿は輕井澤に行つて不在！ 私が病院に連れて行くより他に途がない。……そこで今丁度私の出先に電話をかけてゐるところであつたといふ始末！

豫て約束してあつた赤十字病院に産婦を連れて行つたのが午後一時十五分前！

醫長診療の結果、お産は今夜の八時か九時頃だらうとのこと。……斯くて病室に落付いてからは二男を一人残して置いて、私は三時に一と先づ帰宅した。それは午後一時半頃、愚妻の病氣診察の爲め、主治醫が見えることになつてゐたので、その結果が氣がよりであつたからのことだ。

歸つて診察の結果を聴き、五時過ぎには赤坂の馬場醫院へ薬を取りに出かけた。さうして調剤の済むまで玄關の椅子に腰をおろしながら「東京より」の原稿——或日の南洲翁——を三枚半程書いた。

薬を貰つて今度は歸途を青山豊川稻荷に急いだ。それは出かけに病妻が娘の安産を祈るため自分に代つてお参りをして呉れとの頼みであつたからだ。

豊川稻荷の社殿の前に立つたのが丁度午後六時！ 娘の安産を祈願し、更に愚妻の病氣平癒を御頼みした。……「苦しい時の神頼み」……これも親たり、夫たるものゝ當然果さねばならぬ尊い務めの一つだ！

歸宅の後貰つて來た薬を病妻に飲ませなどしてゐると、丁度六時半に婿は輕井澤から歸つて來た。こちらからの長距離電話を聴き、その晚遅く歸る豫定であつたのを繰上げ直ちに向ふを立つたが、自分で自動車を運轉しながら、三時間半といふ超スピードで歸り着いたといふ。

そのまゝ彼を促して私達は自動車を病院に走らした。お産は八時か九時の間だといふから無論まだ生れてはゐないだらうと思つてゐた。病院に着いたのが七時一寸過ぎであつた。

ところが、病室の入口に立つてゐた婦長が「お目出度う存じます、お坊つちやまで御座いました」といふ。……これにはいさゝか面喰つた「オヤ！ まう生れましたが、私はまだ八時が九時だらうと思つて、ゆつくりして來ましたが」……「丁度六時五十三分に御安産でした」と婦長はつげ加へた。そして若いおぢさんになつた「男坊もニコ／＼してゐた。」

「昭和十一年八月二十一日午後六時五十三分」私はその瞬間に生れて初めての「お祖父さん」になつたのだ。

赤ん坊が婦長に抱かれて産室から病室に移つて來たのが七時十五分！ 若き父親との初顔面！ それを備から懐しむ一杯で見守つてゐたおぢさんとしての私！ 亞いで種も初孫の顔を見かねた。

間もなく産婦も病室に歸つて來て、白いベットのの上に横はつた。……初産の苦しみはあつたにしても、大役を果し得た喜びの色が顔に漂つてゐた……私もすっかり重荷がおりたやうな氣持で、おぢさんを見守つてゐた。

私は歸宅を急いだ。さうして病床の妻に男子出世の報告をした。妻は病苦をも打ち忘れてニ

ニコリとした。……「これで麻生家の世繼が出來ました。こんな悅しいことはありません」といつた。

「オイ！ 今日からお互におぢちゃんとおバアちゃんだ！ 體を大切にしてお孫の成長を樂しむことにしようね！……さういつて私は病妻を慰めた。妻もうなづいて、近頃はない輝やかなしい目をして微笑んだ。併しその次に來るものは熱い涙であつた、無論それは婦人であり勝ちのうれし涙であつたのだ。」

私もこれでほつとした。それにしても、昭和十一年八月二十一日は、ほんとに忙しい一日であつた。

——一一・八・三〇——

解らない講義

北海道帝大のH教授が札幌農學校を卒業して、助教になつたばかりの頃である。或る時道廳の囑託を受け、農事の巡廻講話に出かけたことがあつた。

植物學者たる同君農村の人達に「稻の異花交配」に就て講話を試みたが、それがまた聽講者達にはどうしても解らなかつた。

H君は歸來、先輩のA學士にその事情を話し「さういふ場合、君はどんな風に説明するか」と質ねた。A學士は道廳の巡廻教師で、日頃農事講話に専念してゐる練達之士であつた。

彼は「そんな六ヶ敷しい學術語を使つては駄目だ、そんな場合には（稻が間男をした）と説明して見給へ！ さうすれば誰にでもよく解る」と教へたといふ話！

學問の實際化と、學理の通俗化！ 六ヶ敷しい學理を平たい言葉で表現してゆくところに、ほんとの學問の値打はある。

私が代議士になつたのは大正十三年であつた。私にはそれまで一度も學校の先生をした経験がなかつた。併し代議士になつてからは「若さ」を保つために、一つどこかの學校で講義を受け持ち、學生諸君の相手をして見ようかと考へた。

丁度その頃東京商科大学で「植民地事情」の講義が空いてゐるので、佐野學長の勤めもあり、その講義を引受けることになつた。

或る日その用件で學長に會つての歸るさ、學校の玄關口で友人のK教授に出會つた。さうして兩者の間に次の如うな會話がとりかはされた。

「こんなところに一體何の用があつて來た？」

「實は今度この學校で講義を引受けることになつた」

「君は學校の講義に經驗があるかネ」

「イヤ！ 今度が初めてだ！」

「そんなら一寸注意して置くが、この學校には全國からなか／＼の秀才が集つて來てゐる。だから餘り解り易い講義ばかりすると學生に馬鹿にされるから、たまには解らないやうな六ヶ敷い講義をすることにし給へ！」

K教授は札幌の先輩であり、在學中は農業經濟學を専攻したが、後アメリカに留學して、生物學を研究した立派な學者であり、且つ近年稀に見るところの眞面目な人格者でもあつた。併し惜しいことには、その後間も無く故人となつてしまつた。

彼は教師としては新米の私を失敗させまいと思ふ友情から、自分の思つたことをそのまま私に教へて呉れたのだ。彼は無論眞剣であつた、併し私はそれが不思議でたまらなかつた。

私は「御親切ありがたう！併し僕には解らないやうな六ヶ敷い講義は到底出來さうもないからきつと學生に馬鹿にされるだらう！」といつてそのまゝ別れた。

いよ／＼開講の日が來た。そこで私は學生達に先づこの話を打ち明けた。さうして「僕は飽まで解り易い講義をするつもりだから、馬鹿にしたかつたら遠慮なく馬鹿にし給へ！」といつて置いて講義を始めた。

併しその後別に學生から馬鹿にされたと思つたこともなかつた。……否な寧ろそれが評判になつて次の學年からは、うんと聽講者が殖えた。だから世の中はなか／＼面白いものだ。

これはまことに馬鹿げた話だ。併し實際さういふことのあるのが我邦の大學であり、さういふ解らない講義をするのが我邦の學者であるといふならば、まことに困つたことである。またさういふ學生が多いといふならば、尙ほ更それは困りものだ。

農事講話と大學の講義との間には素より差別がなければならぬ。併し何れの場合でも、六ヶ敷い學理を解り易く説明して行くところにほんとの學問はある。

近頃教育改善に就ていろ／＼論議されてゐる。併しこの際、最も必要なことは、學問の實際化であり、學理の通俗化である。さうしてそれによつて國民に最も大切な「常識」の普遍化を圖ることが何よりも一番急務ではないか？

犬と猫

犬も猫も家庭の小動物であることに變りはない。併し或る人は、犬を愛し、或る人は猫を好む。

私の父は狩りが好きで、特に犬を愛した。故に私の家には何時も獵犬が二、三匹ゐないことがなかつた。

小學校時代、私はよく父に連れられて兎狩に出かけた。そして父がワナを入れる間犬の番をさせられて、つらい思ひをしたこともあつた、その代りに獲れた兎をかついで家路を急ぐ時の悦しかつたことは、今だに忘れることが出来ない。

或る年の夏、臺灣在職中の私は二、三年ぶりに郷里に歸つて來た。私が自分の家の門をまた

いだかと思ふと、中から三匹の犬が吠えながら飛び出して來て、今にも私に喰ひつきさうな勢ひを見せた……無論それは私にとりて初対面の犬ばかりであつた。

「馬鹿つ！ お前達の御主人ではないか、吠える奴があるかつ！」と父は一喝した。

それから三日ばかり滯留してゐるうちに、私はすっかり犬と仲好しになつてしまつた。

ところが、その後三年ばかりして歸つて來た時のことである。私が門を這入ると三匹の犬は相變らず非常な勢ひで飛び出して來た。併し前回とは打つて變つて如何にも悦れしさうな目付きで、尻尾を打ち振りながら、代る／＼私に飛びついた。そしてそれがまた私には堪らなく悦しかつた。

「犬は三日飼へば一生その恩を忘れない」といふが、ほんとにさうだと思つた。そして犬の記憶のよいのに、私はすっかり感心してしまつた。父は「だから犬は可愛くてたまらないのだ」といつて、目を細くして喜んだ。

大好きな父も寄る年波には勝てないと見えて、その後兎狩を止めれば、好きな犬を飼ふのも止めてしまつた。その代りに何時の間にか猫を飼つて可愛がる様になつた。

父は「飼つて見ると猫だつてなか／＼可愛いもんだよ」といつてゐた。そして私は「父も矢張り年寄りになつたんだなア」と思つた。

私の東京生活は、もう十三年にもなる。子供達は日頃、犬が飼ひたい、猫が飼ひ度いと訴へるが、私はその都度それに反対して來た。そしてそれには理由のあることだ。嘗て臺北で子供達の飼つてゐた子兎が近所の犬に食はれ、更に東京に引越してからも、同じ様に子兎が犬に襲はれて悲しい最期を遂げた。

そればかりではない今度は他所から貰つた鶯が二度も猫にやられてしまつた。私は自分の飼犬や飼猫が、同じ様なことを他所様で仕出かすことがあつては申し譯がないと思つた。故にせせこましい都會生活には、犬も猫も禁物だと考へたからのことだ。

ところが今から十日程前に、親類の子供が連れて來た一匹の子猫が、そのまゝ私の家に落ち付いてしまつた。これを見た子供達は多年の宿望が叶つたといふので大變な喜び方である。そしてそれに「玉」といふ名を付けた。

飼つて見ると一匹の子猫でも、確かに家の中を賑かにし、また明るくもする。

今度は子供達よりも私の方が、より以上に猫に興味を待つ様になつた。私は今「日本青年會」の依頼により「新興日本叢書」の一つである「人口問題と海外發展」と題する本を書いてゐる。私が熱心にペンを走らしてゐると「玉」はグル／＼喉を鳴らしながら私の膝の上に乗つて來る。私はそれをそのまゝそつと寝かして置いて相變らず原稿を書きつづけてゐることが度々である。嘗てマホメットが外出のため椅子から立ちあがらうとしたとき、自分の着てゐる外套(?)の裾の上に飼猫が眠つてゐるのに氣がついた彼は安眠を妨げまいと思つて、そつとその外套をぬぎ捨て、置いて靜かに自分の部屋を出て行つたといふ話!

片手にコーラン片手に劍! 斯くて回教を天下に押し廣めて行つた快傑マホメットにもかうした優さしい半面があつた。そしてそこに私達は何ともいへないありがたさを感じる。併し今自分で猫を飼つて見ると、矢張りさうした氣持が浮んで來るから不思議だ!

「猫は三年飼つても三日でその恩を忘れる」といはれてゐる。或はさうかも知れない、併しそれとこれとは別問題だ。故に私達人間は夢にも猫から恩返しをして貰はう等と思つてはならぬ。

併し恩を忘れるのは猫ばかりではない。近頃は人間にもさうした手合が少くはない。而も若い人達に特にそれが多いのを私は悲しく思ふ。

私達は人間だ！ 故に私達は猫にも劣る様な行爲だけは断じてし度くないものだ。

——一・九・一七——

【有】と【無】

數年前の今頃であつた。私は東海道の汽車の窓から秋晴れの空に富士を眺めつゝ同席の丑男爵と四方山の話に耽つたことがあつた。

其の際丑男は「自分は不思議に鹿兒島出身の先輩にお世話になつたが、その中でも特に樺山伯に可愛がられた」といつて、伯に就て興味の深い多くの話を聞かして呉れた。伯は朝早く起きて海岸を散歩せられるのが普通であつた、従つて丑少年もよくそのお伴をした。伯が毎朝「海水」で顔を洗はれるのを見て不思議に思つた丑少年は「小父さん！ 海水で顔を洗つたら氣持がよいですか？」とたづねた。

「ウハ！この水がアメリカまで續いてゐるのだと思ふと氣持がよか！」と靜かに答へたのが大將であつた。

丑男はこの話をして「自分は今の立場上、いろいろの政治家に接する機会が多いが、併し樺山伯の如くに茫洋として器の大きい人物は近頃では一寸見當らない」とつけ加へた。昨年春、私は郷里の大先輩M伯爵をお訪ねした。そしていろいろ有益なお話を承ることが出来た。M伯爵は南洲翁や西郷從道侯、それに大山元帥その他の方々の偉らかつたことを多くの實例を引いて次から次に話された。……そして「私心がなく、親切で、犠牲的で、而も器が大きかつた點に於て、今時の人達に見ることの出来ない偉さがあつた」といふのがお話の結論であつた。私はその際、數年前の車中に於ける丑男の話をも思ひ出して、「それは過去に於ける我が薩摩の教育が然らしめたのではないでしようか」とたづねて見た。すると伯も「それも大きな原因の一つであつたに違ひない」といはれた。

近頃の人達は、私心があり、不親切で、犠牲的精神に缺け、而も器が小さいのが普通だ。そ

してそこに今日の凡ての行詰がある。

最近日本は「國」としては大きくなつて來た。併しこれと反對に日本人は段々「人物」が小さくなつて來る。そして多くの一寸坊達が團栗の背比べをしてゐるのが現代日本の姿だ。而もその原因が教育の缺陷に在りといふならば、何を差し措いても先づ教育の改善が必要ではないだらうか？

そして私が多年「教育を地方に還せ！」と主張する所以もそこにある。

更に話は後に戻るが、或る時南洲翁の軸のかゝつてゐるのを見て丑少年が「小父さん！これはほんものでしようか？」と質ねた。

すると樺山伯は「ほんものと思へばほんものよ、にせものと思へばにせものよ」といはれたといふ話！

私は丑男からこの話を聽いて、矢つ張り伯は偉らかつたのだなと思つた。

「ほんものと思へばほんものだし、にせものと思へばにせものだ」といはれた伯の言葉は何でもない様で、實はそこに何ともいへない一種の哲學を味ひ得る様な氣がしてならなかつた。

凡て事物を「實」と見、「空」と感じ、更に「有」と解し、「無」と観するもの、所詮は自分の心からだ！

そこで私は一休の歌を思ひ出す、一休の歌に

「ありといへばありとや人の思ふらん、こたへてもなき山彦の聲」

といふのと、

「なしといへばなしとや人の思ふらん、こたへもぞする山彦の聲」

といふのがある。即ち前者は「有」であり、後者は「無」である。「有」も「無」もその差別は紙一重！否な一心悟ればその區別さへもない。……人生は凡て「有」であり、更に「無」である。

「有」の世界に「無」を發見し、「無」の世界に「有」を感得する。……それがほんたうの人生だ！そして凡ては自分の心から！

一九二三年八月二日

一九二三年八月二日

四海一家

去る八月二日の晩、初めてベルリンからのオリンピック放送を聴いて私は實に世界は狭くなつたものだと考へた。そしてそれが科學の躍進的進歩だと思へば、ぐづ／＼してゐられない様な氣もした。

數年前までは、ラヂオの國際放送は雜音が多くて聴くのに骨が折れた。ところが一昨年ヒンデンブルグ大統領の葬儀に於けるヒットラーの雄辯をベルリンからラヂオを通じて聴いたときは、一段の進歩で、非常に明瞭になつてゐた。

今回のオリンピック放送は、更に一層の明瞭さを加へ明治神宮外苑に於ける競技の放送を聴いてゐると別に變りがなかつた。

従つて私は嘗て留學の當時、よく出かけたグルーネワルドのあのなつかしい森の面影を偲びつゝ自ら夫の地に在るの思ひをしながらそれを聞いた。そして私は今更ながら科學の力の偉大なるに驚かざるを得なかつた。……即ち科學の進歩は、地理的に空間的に、今後益々世界を狭くして行くことであらう。

十八世紀の後半期に於て、フランスのボルテヤーは「フランスは陸を支配し、イギリスは海を支配す、故にドイツは空でも支配したらよからう」といつた。

當時のドイツの國力は英、佛兩國の強大なるに比すべくもなかつた。佛の陸軍！ 英の海軍！ それを讚美したボルテヤーは仕方がないからドイツは空でも支配したらよからうと冷笑したわけだ……ところが今日はどうか？

今日では制空の力なきものは眞の國防を全うすることは出来ない。即ち制陸制海制空の三者を併有してこそ初めて天下の覇者たることも出来る。……併しその飛行機や飛行船にしてもこれが發達は極めて最近のことだ。

例のツェーベリン伯の飛行船が初めて出來上つて、フランクフルト・アム・マインからベルリ

ンに飛んで來て、カイザーは無論のこと、全ドイツ國民を熱狂せしめたのは明治四十二年八月二十九日で、私が初めてベルリンに着いた日の前日であつた。

當時ヨーロッパ諸國では毎日のやうに、飛行機や飛行船が墜落して、多くの犠牲者を出してゐた。私の友人K學士のゐた下宿のお婆さんが「一體人間が鳥の眞似をして、空なんか飛ぶからひどい目に會ふのだ」といつて、私達を笑はしたのもその頃のことであつた。

爾來僅かに二十有七年！ 今日空軍及航空事業の發展の目覺しさ！ 實に隔世の感無きを得ない。

科學を無視して何事も爲し得ない世界の現状！ 科學の進歩は益々世界を狭ばめて行つてゐるのだ。……そしてそこに氣の付かない國家國民は、たゞ衰滅の一途を辿るより外に途はない。併し世界の凝縮は、單に地理的に且空間的に行はるゝだけでなく、更に歴史的にも時間的にも行はれねばならぬ。即ちこの意味に於て、私達は二千年、三千年の昔にさかのぼつて、歴史的事實を現代に呼び戻して見なければならぬ。

科學の力は強い。併しその強い科學の力をも支配するのが人間の精神力だ。そして私達は

その強い精神力を我が建國の大精神に求めなくてはならぬ。

今日から二千六百年前の十月五日に、東征の聖途にお就き遊ばされた神武天皇は、その御宣言の中に『天業を恢弘し天下に光宅せん』と仰せられ、更に六年後に大和の橿原に於て發せられた大詔中に『六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲す亦可らずや』と仰せ出された。……そしてこの大御心こそは、實に我が建國の大精神であり、我が肇國の大理想でなくて何であらう。

これから四年の後には、我が東京でオリンピック大會が開催されることになつた。併しそれよりも私達にとりて、もつと大切なことは、丁度その年が皇紀二千六百年に相當することだ。即ち私達は二千六百年前の昔に於ける我が建國の大理想を現代に實現すべく努力しなくてはならぬ。

科學の力は日に月に世界を狭くして行く。そして我等の祖先が二千六百年前に描いた建國の大精神、肇國の大理想を實現するには、益々都合よき時代となつて來た。

皇紀二千六百年！ 私達はそれを一期として『八紘一字』の大國是に基き『人類同善四海一

家』の大理想を實現すべく、我等日本民族の有する世界的大使命遂行の爲め、力強く新しきスタートを切らねばならぬ。

絶対に必要だ！

日本人は馬鹿に劃一主義を好む國民だ。教育の劃一を初めとし、諸般の制度悉く劃一に偏してゐるところに、今日の悩みがある。最近政府の發表した税制整理の如きも、中央集權的な劃一主義が餘程濃厚になつて來てゐる。

斯くの如く一面劃一主義の弊に陥つてゐるかと思ふと、一方に於ては、また馬鹿に不統一で、雜然たる部門がないでもない。即ち日本人の衣食住に就て考へて見てもその一端を窺ひ知ることが出来るが、「文字」の書き方の雜然たることもその一例だ。

我邦では文字は縦に右から左に書いて行くのが普通だ。ところが先日久しぶりに會つた友人が「文字は縦に左から右に書いてゆくのが自然だ」と主張してゐるのを聞いた。

併しそれよりも横書きの場合がより以上に問題だ。この場合には右から左に書くのが普通であるが、それとて一定してゐるわけではなく左から右に書く場合も少くはない。従つて假名書きの場合などは、特に左右何れから讀むのか一寸明瞭でないことが頗る多い。

私の長男が小學校に入學したばかりの頃であつた。近所の子供達が遊びに來て一しよに繪本を讀んでゐた。

「オイ君！ これを見たまへ、をかしたことが書いてあるよ！」

「ドレ！ 見せたまへ！ オヤほんとに、をかしたことが書いてあるね！」

さういひながら子供達はクス／＼笑つゐたが、聽て私の子供は「お母ちゃん一寸來て御覽！」

こんなこと書く小父ちゃん馬鹿だね！」といつた。

私の家内もそれを讀んで「ほんとにいやな小父さんだね！」とつぶやいた。

今度は私が「ドレ！ お父さんに貸して御覽！」といつて、その繪本を受取つた。そして假名で横書きにしてあるのを右から讀んで見ると、「クロゴスチンボ」と書いてある。……これでは子供達が「いやなことを書く小父さんだ！」といふのも無理はないと思つた。

併しそれを更に左から読み直して見ると『ボンチスゴロク』と讀めた。……私は一人で吹き出した。そして『何んだこれは左から讀むのだよ』といつて子供達にその本を返して遣つた。子供達もそれを讀み直して、『何んだボンチスゴロクか』といつて、大笑ひしたことがあつたのを、今でもよく記憶してゐる。

他所のことはよく知らないが、東京の『圓タク』では横書きに車輪番號と運轉手の氏名とが書いてある。ところが或る者は右から左へ、また或る者は左から右へ書いてあつて少しも統一がない。殊に近頃は朝鮮人の運轉手が多くなつて來たので、どちらから讀んでよいのか分らない場合が少くない。

先日乗つた『圓タク』の運轉手の氏名が右から讀めば『和文公』であり左から讀めば『公文和』であつた。私はこれを見て内地人か朝鮮人が先づ第一にその判断に苦しんだが、多分『和文公』といふ朝鮮人だらうと考へた。

併しこの人は内地人で、左から右に讀むのであつた。即ち『公文』が姓で『和』が名であつたとして『クモンカノー』と讀むのだといふから随分六ヶ敷い氏名もあるものだと思つた。

東京市中を歩いて見ても、看板の書き方が一定せず、可なり目ぐるはしい思ひをすることが多い。故に私は横書きの場合には、左右何れから始めるか統一することの必要を主張する。

嘗て鐵道の驛名を左から右に書くことにして、書き換へに着手したことがあつた。然るにそれが全部に普及しないうちに、はやくも内閣が更迭してしまつたので、再び逆戻りして今日に及んでゐる。

帝國議會にも横書きの統一に就て毎年建議案が提出されるが、こんなものはどちらかに早く一定して混亂を少くすることも時務の一つではないだらうか？

私は凡て極端な劃一主義はこれを排撃する。併しかういふ問題は國民生活を簡明ならしむるために劃一であることが絶対に必要だ！

青森の思ひ出

一昨七日の午後七時、上野驛の急行で青森に向け出發、昨八日の午後開催の政友會東北、北海道大會に臨み、更に夜の演說會を済まして、同夜十時發の汽車で歸京の途に就いた。

今は丁度朝の九時二十分！ あと一時間で上野に着くことになる。その車中の一時間を利用して『青森の思ひ出』を書いて見ることにする。

大正十三年の秋、私は青森市に於ける政友本黨の大會に臨席したが、それは私が初めて代議士に成つて半歳経つか経たない頃のことであつた。午後の大會を終へ、夜に入つて二ヶ所演說會が開催せられた。私は中橋、中西、中村の大先輩の中に混つて、たつた一人の陣笠辯士として第一會場に出演した。

而もその第一陣を承つたのが中西六三郎氏！ 同氏は人も知る如く、實に下院切つての大雄辯家であつた。然るに同氏が壇上に現はれるや、計畫的な大野次が盛に飛んだ。……老練無比な辯士中西氏もこの野次に對抗して惡戰苦闘、遂に何時もの如うな雄辯はこれを聴くことが出来なかつた。

かゝる喧騒の中に第二陣に起つたのは當夜唯一の陣笠辯士東郷實であつた。私の論旨は「我國の政治を権力、金力より解放して、眞の人格政治を確立せよ！」といふにあつた。

然るに眞向うの二階座敷に陣取つた一團の野次が猛烈な野次を贈り、中には「お前の演說は政談演說ぢやない。そんな演說は大學に行つてやれ」とどなる奴もゐた……兎に角この大野次と闘ひながら約四十分に亘つて演說をどうかかうか遣り遂げて壇を降りた。そして私は「野次り倒されなかつただけでも、經驗に乏しい陣笠としては、先づ成功であつた」と思つて自ら慰めてゐた。

私の次に壇上の人となつたのが中村啓次郎氏であつた。私は樂屋裏から、この古兵者がどんな論法で野次に對抗するであらうかを興味を以て聴いてゐた。

中村氏は開口一番……「聴衆諸君の中には前辯士の演説に對し政談演説でない」と野次つた人があつたが誤れるも甚だしい！ 唯徒らに大言壯語、大向うを唸らせる様な演説は舊式な政談演説だ。……東郷君の演説を樂屋裏で聽いてゐたが、あれこそは、實に新しい政談演説であつて、明日の日本を双肩に背負つて起つべき政黨政治家の爲すべきほんたうの政談演説だ！ 然るにそれを理解せずして、政談演説にあらずと評するが如き諸君の時代遅れを悲しまざるを得ない」と高飛車に出で、先づ以て野次に一矢を放つた。

更に同氏は語を亞いで「僕には中西君の如き雄辯なく、また東郷君の如き博識もない。併し話上手よりは聞き上手といふことがある、故に演説の出來不出來は聴衆諸君の心得一つで決るのだ、どうか野次らないで僕の演説を靜かに聽いて呉れ給へ！」と眞向から要求した。

果して野次は聲を潜めた。そして中村氏は靜かに論旨を進めて行つた。私はこれを聽いて流石に老練なものだと思つた。……私はそれ以來野次と闘ふの愚を悟り、到る處の演説會に於て、何時も野次封じの戰術に出でたが、その効果は顯著なるものがあつた。随つてその後何處の演説會でも、たいした野次に遭遇することもなく今に及んでゐる。

私は昨夜壇上の人となるや、丁度十二年前に同じ劇場で同じ演壇に立つた當時を追想して、今昔の感に堪へざるものがあつた。そして私は前回に比すれば尙は一層風變りの演説を試みた。併し「お前のは政談演説ぢやない！」と野次るものもゐなかつた。果して時代が進んだのだらうか？

私は最後にいつた。……「私は十二年前にこの壇上から人格政治の確立を絶叫した。然るに我國の政黨も國民もそこに目醒めなかつた。……目醒めざりしが故に、政黨政治は遂に今日も行詰りを見るに至つた。今や議會政治の鏡には塵が積り曇を生じてゐる。而してこの塵を拂ひ、この曇を拭ひ、以て議會政治の明朗さを恢復し、眞の立憲政治を確立するの任務を有するものは果して誰ぞ！ いふまでもなくそれは政黨自身であり、全國民そのものでなければならぬ！」私は斯く叫んで壇を降りた。それにしても十二年前相共にこの壇上に獅子吼した先輩のうち中西氏倒れ、亞いで中橋氏逝き、中村氏また先年腦溢血にかゝつて再び起つことが出來ない。それを思へば今更ながら人生の果なきを覺え實に感慨無量である。

而も今私は依然として名もなき一陣笠たるに過ぎない。併し四人のうち現在に残された、た